6 物語3

単元のねらい

◆音読する、平曲を聞くなどを通して『平家物語』特有の表現を味わう。
◆軍記物語の文体の特徴について理解する。
◆物語に描かれた人物の心情を深く読み取る。
・文字を読むだけではなく、琵琶法師が「声」で語り伝えることで広まった「平家物語」を、平曲を聞く、音読することを通して、特有の表現、調子を味わう。
・軍記物語の文体の特徴である和漢混交文について学び、歴史的な文体の変化について理解を深める。
・「木曽の最期」を脚本化することで、登場人物の心情を深く読み取る。
軍記物語の最高傑作とされる「平家物語」に描かれた戦いの様相と、戦いにおける登場人物の思いや考えを読み取り、特徴的な文体について理解することをねらいとしている。

単元の構成

「平家物語」より、「木曽の最期」を取り上げた。「木曽の最期」は、これまで学習してきた教材に比べて長編だが、登場人物の心情に心を揺さぶられる屈指の名場面である。参考「祇園精舎」では、ＱＲコードを読み込んで平曲を聞く、暗唱させるなどで、美しい文体を味わうことができる。
「古文を読むために6」では、「平家物語」にも頻出する敬語、音便について、説明している。古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりについて学習できる。

「古文の窓５　和文と和漢混交文」では、和文と和漢混交文の違いについて解説し、古典文学の文体とその多様性に目を向けさせる。

「単元の言語活動６　人物の心情を想像して「木曽の最期」を脚本化する」では、作品を脚本化し、実際に演じてみることで、登場人物の心情を生き生きと想像することを目的とする。また、本文を理解する際に、文章の意味を解釈するだけでなく、演劇などの様々な形態で再生産することが可能であることを学ぶ機会ともなる。

物語3

教材のねらい

1 選定の理由

「平家物語」から一編「木曽の最期」と参考教材「祇園精舎」を扱う。「平家物語」は軍記物語の代表的作品であり、その中に描かれている源平の争乱は日本の歴史を考えるうえでも重要な位置を占める。また、この中の数々の逸話は、古来、語り継がれてきた国民的教養とも考えられ、例えば「判官びいき」という言葉はいまだに日本人の心性を表すものとして使われている。「木曽の最期」は英雄の中にもある人間的弱さ、強いきずなで結ばれた人間同士の相手を思う気持ちなどが、現代の我々にも共感できる教材である。冒頭の「祇園精舎」は、「古文の窓5　和文と和漢混交文」も併せて読み、音読させる、平曲を聞かせるなどして、物語全体の基調をなす文章を味わわせたい。

「単元の言語活動6　人物の心情を想像して「木曽の最期」を脚本化する」は、登場人物の微妙な心の動きを巧みに描写した名場面をシナリオ化し、声に出して演じることで生き生きと表現することをねらいとした。

2 指導のねらい

「木曽の最期」は、ドラマティックな場面を取り上げているので、ストーリーの展開や、義仲・巴・兼平主従の心の交流と最期のときなど、登場人物の心情をしっかり把握させることを主眼としたい。長年にわたって人々の心を震わせてきた物語を読み味わい、現代に生きる生徒たちにも指針となるようなものをつかみ取らせる。

「単元の言語活動6　人物の心情を想像して「木曽の最期」を脚本化する」では、声に出して演じることで、人物の心情について想像力を働かせ、感受性を豊かにさせたい。

3 単元の目標

目標について、別表「単元の目標一覧」をご確認ください。

4 評価規準

学習指導要領との対応等	評価規準例	〔知識・技能〕						〔思考力・判断力・表現力等〕		
		(1)ア	(1)ウ	(1)エ	(1)オ	(2)イ	(2)ウ	(2)エ	(2)オ	B(1)ア	B(1)イ	B(1)エ	B(1)オ
(1)ア	言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。	○											
(1)ウ	我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしている。		○										
(1)エ	文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。			○									
(1)オ	我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解している。												
(2)イ	古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解している。					○							
(2)ウ	古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解している。						○						
(2)エ	時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解している。							○					
(2)オ	言文一致体や和漢混交文など歴史的な文体の変化について理解を深めている。								○				
B(1)ア	「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。												
B(1)イ	「読むこと」において、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。												
B(1)エ	「読むこと」において、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。												
B(1)オ	「読むこと」において、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもっている。												
木曽の最期		○	○	○			○	○	○	○	○	○	
祇園精舎		○	○	○			○	○	○	○	○	○	
古文を読むために 6		○	○	○			○	○	○	○			
古文の窓 5						○			○				
単元の言語活動 6				○	○		○				○		○

〔主体的に学習に取り組む態度〕	
進んで音読する、平曲を聞くなどを通して「平家物語」特有の表現を味わい、軍記物語の文体の特徴について理解し、学習課題に沿って、それぞれの場面での登場人物の心情を深く読み取ろうとしている。	○
進んで音読することを通して「平家物語」特有の表現を味わい、軍記物語の文体の特徴について理解し、今までの学習を生かして、「木曽の最期」を脚本化し、物語に描かれた人物の心情を深く読み取ろうとしている。	○
	○
	○
○	

■言語活動例との関連（【　】は関連する指導要領の言語活動例）

単元の言語活動６　人物の心情を想像して「木曽の最期」を脚本化する【〔思・判・表〕　B(2)オ】

物語3

指導計画案

指導上の重点目標

【木曽の最期】

1　物語の背景となる時代、登場人物とそれにかかわる人物の関係、彼らの立場、置かれている状況を把握する。
2　敬語を理解する。
3　全文を正確に音読する。
4　ビジュアル的イメージを描きながら読む。
5　義仲と巴・兼平の互いを思う気持ちを読み取る。

学習活動

導入

❶ 源平の合戦について、知っていることをあげる。

❷ 源平の合戦の経緯を説明し、ここではだれとだれが戦っているのかを明らかにする。

❸「平家物語」の中で木曽義仲はどのような武将として描かれているか調べる。知技

展開

❶「古文を読むために6」を参考にし、頻出の敬語の意味と用法その他の重要語句を古語辞典で調べる。知技
→「言葉と表現」1

❷ 音便や敬語の読み方に注意し、全文を正確に音読する。知技 思判表
→「学習のポイント」1

❸ 義仲の装束や物の具について調べ、合戦のイメージをつかむ。

指導上の留意点

❶ 中学の歴史で習ったことや、アニメ、漫画、ドラマ化されたものなどから、知っている人物名を挙げさせる。

❷ 生徒の歴史の知識に補足説明をし、ここでは源氏同士の戦いであることを確認しておく。

❸「倶利迦羅落」「猫間」など、義仲の異なる面が描かれているところを紹介し、比較しながら読むよう指示する。

❶ 本文中に敬語が多いので、スムーズな読みと理解のために解説をしておく。「のたまふ」「申す」「おぼしめす」「候ふ」「給ふ」他に「奉る」「おぼゆ」「さす」など。多義語は文中での意味をよく考えさせる。

❸ 近代戦と異なり、鎧・甲・太刀などが華やかなことに注意させる。

		❹ 義仲についての記述と巴・兼平についての記述をそれぞれ文中から抜き出し、そこに表れている心情を読み取る。思判表 主態 (1) 巴との別れのとき (2) 主従二騎になったとき (3) 義仲と兼平がそれぞれの最期を遂げたとき 以上の部分に、どのような気持ちが表れているか、考える。 →「言語活動」1
1 義仲と兼平の人物像をまとめ、そのように描かれた背景について考える。 2 語り物の文章の言葉遣いや調子を味わう。 3 物語全体を流れる思想を理解する。	まとめと発展	❶ 前の時間にまとめた義仲と巴・兼平についての記述から、これらがどのような人物として描かれているか考える。また、彼らの言動の中で共感するところがあるか話し合う。主態 ❷ 音便や文の調子に注意しながら、内容をふまえて朗読する。知技 思判表 ❸「木曽の最期」から読み取れる「諸行無常」「盛者必衰」について考える。思判表
【単元の言語活動6　人物の心情を想像して「木曽の最期」を脚本化する】 1 脚本化して演じることで、	展開	1 ❶ 担当するシーンと役割分担を決める。 グループを作り、次のA〜Cから一つずつ担当するシーンを決める。 シーンA「義仲と巴の別れ」
		❹ 巴に対しての義仲は、相手を思いつつも表向きは名誉を重んじる大将であり、巴は女性でありながら最後まで戦いの人として描かれる。また、義仲と兼平は、共に相手のことを思っての言動であるが、義仲はもはや大将ではなく一個人に戻って兼平に相対しているのに比べ、兼平はあくまで義仲を英雄のまま死なせたいという態度をくずしていないことを読み取らせる。
		❶「平家物語」が語り物という形で大衆に親しまれてきたことを踏まえ、大衆の求める英雄像について考えさせる。 ❷ 内容の理解が、なめらかな読み、文章を味わうことにつながるような朗読を指導する。 ❸ 冒頭の「祇園精舎」で物語全体を貫く思想が提示され、その後に実例が語られるという構成になっており、「木曽の最期」もその実例の一つであることを理解させる。
		❶ クラスの人数によっては一シーンを担当するグループが二つになってもよい。

登場人物の心情を深く理解させる。 2 ナレーションを加えることで本文に省略されている描写を解釈させる。 3 グループ発表に対して、自分の意見や感想を持たせ、相互評価や自己評価をさせる。	シーンB「義仲を励ます兼平」 シーンC「義仲と兼平の最期」 ❷ 義仲役・巴役・兼平役・ナレーション役・演習などの役割分担を決める。 2「せりふ」と「ナレーション」を考え、脚本を作る。知技 思判表 ❶ グループ全員で話し合い、登場人物の「せりふ」を考える。 ❷ 場面の説明など、「せりふ」だけでは伝わりにくい要素を補足説明する「ナレーション」を考える。 ❸「せりふ」と「ナレーション」を脚本にまとめ、読み合わせをする。不自然な「せりふ」や、伝わりにくい「ナレーション」の表現がないか確認する。	❷ グループ内で必ず何かの役割を持たせるようにする。 ❶「木曽の最期」の会話文を参考にするが、登場人物のさまざまな心情を想像して、本文には書かれていない表現を補ってもよい。 ❸ ワークシートを活用し、各登場人物の「せりふ」と「ナレーション」とを分けて書く。
まとめと発展	3 完成した脚本を基に演じる。主態 ❶ グループごとに脚本を輪読して、発表する。「せりふ」の担当者は、登場人物の心情を想像し、感情を込めて読む。 ❷ ほかのグループの脚本のよかった点をあげる。	❷ 他のグループの発表の感想を書かせて、交換させてもよい。

平家物語

作者

「平家物語」は、その成立の事情からして特定の作者の作品とは考えにくいのであるが、最初の一まとまりの物語、いわゆる「原平家」の作者は誰かという点で最も注目される伝承は「徒然草」第二百二十六段である。それによれば、「後鳥羽院の御時」、「信濃前司行長」が入道し、天台座主慈円の庇護のもとに、「平家物語を作りて、生仏と言ひける盲目に教へて語らせ」たという。そして、「生仏」は「東国の者」であったから、「武士のこと、弓馬のわざ」を東国武士たちに聞いて、行長に書かせたとある。

この伝承を直接裏付ける資料はないが、「平家物語」を作り語った人、あるいは人々の人物像について、具体性のある記述である。さらに、この「行長入道」については、慈円の兄、九条兼実の日記「玉葉」に見える、下野守藤原行長であろうとする説がある。その人であれば、中山家の人で、九条家の家司を務めた縁で、慈円とのつながりもあり得る。また、この行長の従弟の藤原時長は、「尊卑分脈」に、「平家物語作者の随一」とあるなど、中山家の人々が「平家物語」の成立にかかわりがあったと考える人は多い。

作者については、その他に、吉田資経・源光行・菅原為長ら、中世以降の資料に名の出てくる人物は多くあるが、いずれも確定できるものはない。「原平家」の成立、資料や話題の提供協力、増補加筆などのさまざまの段階で、多くの人々がかかわっており、これら資料に名の出てくる人物が、その何かに携わっている可能性はある。

出典

▼底本

新日本古典文学大系「平家物語」（梶原正昭・山下宏明校注、平成三〔一九九一〕、五〔一九九三〕年、岩波書店刊）によった。同書は東京大学国語研究室所蔵の旧高野本を底本としている。これは語り物系の一方流の諸本の中で覚一別本と呼ばれるもので、他に岩波文庫本、日本古典文学全集の底本に用いられている。今日よく読まれているのはこれと同系の一方流のテキストで、覚一本（日本古典文学大系）、葉子十行本（日本古典全書、角川版全注釈）などが底本となっている。これらは十二巻に建礼門院のその後を語る灌頂巻が加わる体裁を持つことを特徴としている。なお、参考「祇園精舎」の「朱昇」（九四・5）は原文に「周伊」とあるのを改めたものである。

▼書名

藤原定家が書写した「兵範記」（平信範の日記）の紙背文書に

仁治元（一二四〇）年の書状があって、「治承物語六巻、此間書写候」とあり、「六巻」の下に「号平家」と注記があるところから、「治承物語」という呼称があった、または治承のことを記した物語が存在したと考えられている。また、「号平家」の注記は早くから「平家物語」と呼ばれたことを示しており、一二四〇、五〇年代以降、「平家物語」の名が一般に行われたようである。なお、読み物として展開した系統の増補系には、「源平闘諍録」「源平盛衰記」などの本がある。

▼成立

特定しにくい。「徒然草」第二百二十六段の「後鳥羽院の御時」に従えば、承久三（一二二一）年までに、何らかの形で「平家物語」と言える作品が成立したことになるが、作品の内部徴証から鎌倉幕府に藤原将軍が登場する承久元（一二一九）年以前とする説もあり、この頃にいわゆる「原平家」の成立を想定する説が多い。その成立当初の形態について山田孝雄氏は、多様な諸本の全てが巻一・六・九の三巻の書き出しを同じくしていることなどから三巻本であったかとの仮説を立てている。

この「原平家」の内容について、九条道家の日記「玉蘂」の承久二年の記事に、平頼盛の子、光盛が「平家記」「平家」を多く所持したとあるのは、平家一門の記録のことであろうが、三巻の「平家物語」が承久初年頃に成立していたとすれば、そのような資料的な記録をまとめた、素朴な物語であったろうと考えられている。その後、前記「兵範記」紙背文書の「治承物語六巻」の段階が三四〇年頃にあったとすれば、語り物系の完成態である十二巻本に至る発展段階が考えられるわけだが、他に、読み本として多くの題材を吸収して大部の物語に成長していった流れもあり、諸系統の展開と相互関係とは単純でない。語り本の系統についてだけ記しておくと、鎌倉中期頃には琵琶法師の当道座が確立し、一方流と八坂流とに分かれ、十三世紀の末頃には完結した「平家物語」を語っていたと考えられている。やがて、南北朝時代に一方流に覚一が出て、「平家物語」の語りを大成し、応安四（一三七一）年には、その定本と言うべき覚一本を完成した。

▼内容

語り本系の諸本は十二巻から成るが、一方流では、建礼門院の後日を物語る話を独立させて、灌頂巻として付加する形態を作り上げた。十二巻の構成について、平家の興隆から清盛の死を物語る巻六までを前半、源平の抗争と平家の衰亡を物語る巻七以下を後半とする二部説、清盛（巻一〜五）、源義仲（巻六〜八）、源義経（巻九以下）を中心人物と見て、主役の交替をもって全体を三部に分ける説などが行われるが、源平の対立抗争によって展開した変動期の歴史を、平家の側に立って、その興隆と衰滅という下降の姿として捉える史観が構想の骨格となっていると見るのが、構想についての基本的な理解であろう。

内容となる歴史の範囲は、天承二（一一三二）年の平忠盛の院の昇殿から、建久九（一一九八）年に、維盛の子、六代が処刑され、平家の嫡流が絶えるまで、約六十五年に及ぶが、平家興隆期に当たる保元・平治の乱などは略して、清盛政権の最盛期の、太政大臣に任じた仁安二（一一六七）年頃から、反平家の動きが高まり源氏の挙兵に至る治承（一一七七〜八一）・寿永（一一八二〜八四）の動乱を経て、壇の浦の合戦（元暦二（一一八五）年）とその戦後処理までの約二十年

間の物語が主たる内容となっている。

▼語り物

「平家物語」は軍記物語中の白眉であると評価されるが、それは何よりも、王朝貴族の支配が終わって武家政権が誕生するという大変動が、平家の興隆と滅亡の形で劇的に展開した時代を物語ることによっている。語り物という手法は、その時代を共有した人々が直接間接に作品を成長させていくものであって、激動の時代を生き、そして死んでいった人々への共感が、その激動を形象化して叙事詩の主調音を生み出している。

語り本系の諸本の流麗な和漢混交文の完成に当たっても、語りと享受とが同時に行われる場の意義が大きい。一座制は中世の文芸・芸能の基盤であるが、「平家物語」は源平抗争の国民的伝承を共有する一座という恵まれた場で語りを洗練していった。

参考文献

＊ほかに、角川文庫版（佐藤謙三校注）、講談社文庫版（高橋貞一校注）、岩波文庫版（梶原正昭・山下宏明校注）、講談社学術文庫版（杉本圭三郎全訳注）などがある。

▽主要部訳注・鑑賞

鑑賞日本古典文学「平家物語」冨倉徳次郎　角川書店　昭五十
鑑賞日本の古典「平家物語」梶原正昭　尚学図書　昭五十七
「平家物語の鑑賞と批評」長野嘗一　明治書院　昭五十
「平家物語の世界」水原一　日本放送出版協会　昭五十一

▽研究・評論

「平家物語の研究」佐々木八郎　早大出版部　昭二十三・二十四
「平家物語」石母田正　岩波書店　昭三十二
「中世文学の成立」永積安明　岩波書店　昭三十八
「平家物語の虚構と真実」上横手雅敬　講談社　昭四十八
「平家物語の生成」山下宏明　塙新書再刊　昭六十
「語り物序説ー『平家』語りの発生と表現」兵藤裕己　明治書院　昭五十九
「軍記物語の世界」杉本圭三郎　有精堂　昭六十
名著刊行会　昭六十

▽図録・紀行

古典アルバム「平家物語」市古貞次他　明治書院　昭四十六
写真紀行「平家絵巻」奈良本辰也　新人物往来社　昭四十七
歴史と文学の旅「謡曲・平家物語紀行」白洲正子　平凡社　昭四十八
図説日本の古典「平家物語」永積安明他　集英社　昭五十四

▽教師用

新編日本古典文学全集「平家物語」市古貞次他　小学館　平六
新日本古典文学大系「平家物語」梶原正昭他　岩波書店　平三
新潮日本古典集成「平家物語」水原一　新潮社　昭五十四〜五十六
日本古典文学大系「平家物語」高木市之助他　岩波書店　昭三十四・三十五
「平家物語全注釈」冨倉徳次郎　角川書店　昭四十一〜四十三
「平家物語評講」佐々木八郎　明治書院　昭三十八

▽注釈書

新潮古典文学アルバム「平家物語」牧野和夫他　新潮社　平二
▽研究案内・資料
研究資料日本古典文学「歴史・軍記・歴史物語」大曾根章介他
明治書院　昭五十八
日本文学研究資料新集「平家物語」兵藤裕己
有精堂　昭六十二
「平家物語」（国語国文学研究史大成）高木市之助他
三省堂　昭三十五
「平家物語必携」市古貞次
学燈社　昭四十二
「シンポジウム日本文学・平家物語」山下宏明
学生社　昭五十一
「平家物語研究事典」市古貞次
明治書院　昭五十三
❊生徒用
「平家物語を読む」（岩波ジュニア新書）永積安明
岩波書店　昭五十五
「絵巻平家物語」木下順二文・瀬川康男絵
ほるぷ出版　昭五十九
「平家物語」（新明解古典シリーズ）桑原博史　三省堂　平二
「平家物語」（角川ソフィア文庫　ビギナーズ・クラシックス）
KADOKAWA　平十三
「文法全解　平家物語」（古典解釈シリーズ）杉田黎明
旺文社　平十七
「1日で読める平家物語」吉野敬介
東京書籍　平二十三

図版解説

〈絵本『平家物語』〉

明星大学図書館蔵。江戸時代前期。奈良絵本。十一帖（全十二帖のうち巻十二の一帖を欠く）。絵本着色。他に伝わる『平家物語』の奈良絵本・絵巻は、いずれも十二巻の本文を元に、三十六軸や三十帖などに巻を分割しているが、明星大学本は一巻を一帖で絵本としている。⇩P88

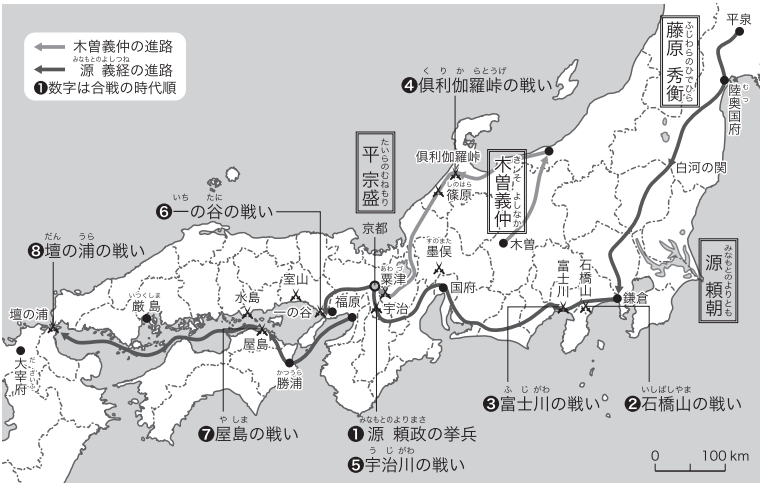
〈平家物語絵巻〉

林原美術館蔵。江戸時代。絵巻。三六巻。紙本著色。土佐左助筆。平家一門の栄枯盛衰を題材とした平家物語を絵画化した絵巻。絵の場面数は七〇五、全巻広げると本紙だけで約九四〇メートルにもなる。筆者については詳細不明。⇩P91・92

〈太平記絵巻〉

埼玉県立歴史と民俗の博物館蔵。江戸時代。絵巻。一二巻。紙本着色・巻子装。推定海北友雪筆。鎌倉時代末期から南北朝の動乱の様子を記した軍記物語『太平記』を絵画化した合戦絵巻。⇩P94

源平の合戦



『平家物語』関係地図　主な武将の進路をあげた。

①源頼政の挙兵

治承四（一一八〇）年五月

以仁王（後白河法皇の皇子）による平家追討の令旨が下り、それに呼応して、源頼政らが挙兵。平知盛・維盛軍に敗れ、逃げる途中で、頼政は敗死。

②石橋山の戦い

治承四（一一八〇）年八月

遅れて以仁王の令旨により挙兵した源頼朝の平家との初めての戦い。頼朝軍は平家方の大庭景親らに敗れ、海路安房（現在の千葉県南部）に逃れ、態勢の立て直しを図り、鎌倉に拠点を構える。

③富士川の戦い

治承四（一一八〇）十月

富士川をはさんで、維盛軍と頼朝軍が対峙する。戦いの前から源氏強しの噂を聞き、怖気づいていた平家軍は水鳥の羽音を源氏の来襲と勘違いして逃げ出す。

④倶利伽羅峠の戦い

寿永二（一一八三）年五月

以仁王に呼応し、木曽で挙兵した木曽義仲は地の利を生かし、頼朝に先んじて京都に上ろうとした。途中、倶利伽羅峠で維盛軍と戦い、知略を生かし、圧勝。

⑤宇治川の戦い「木曽の最期」

元暦元（一一八四）年正月

入京した義仲の評判は悪く、頼朝は義仲追討のため、源範頼・義経軍を派遣。宇治川で義経軍と義仲軍が対決し、敗れた義仲は乳母子今井兼平が戦う粟津（現在の滋賀県）に逃れ、敗死。

⑥一の谷の戦い

元暦元（一一八四）年二月

西国で態勢を立て直し、福原まで戻ってきた平家軍を義経軍が背後から鵯越の坂落で奇襲する。平家軍は大混乱に陥り、船で四国に敗走。

⑦屋島の戦い

文治元（一一八五）年二月

屋島に陣を構えた平家軍を義経軍が荒天をついて阿波（現在の徳島県）に渡り、山越えをして背後より急襲。慌てた平家軍はまたもや敗走。

⑧壇の浦の戦い

文治元（一一八五）年三月

源平最後の戦い。平家の大船に対し、源氏は小船で戦いを挑む。潮流の逆転、水軍の裏切り等で平家は敗れ、滅亡。安徳天皇は祖母の二位殿に抱かれ、入水。

木曽の最期

要旨

木曽殿は討ち死にを覚悟して巴を逃がし、気弱な言葉を漏らしながらも、今井四郎に励まされて名誉の自害をしようとするが、泥田に馬の足を取られて敵に討たれる。それを見て、今井は壮烈な自害を遂げる。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め〜P88・13〈落ちにけり。〉	木曽殿は、堂々の名乗りを上げて、敵の大軍に攻め入り、縦横に駆け割って闘った。三百余騎が五騎になってしまうまで、巴は戦い抜いたが、木曽殿の命令で東国へ落ちて行った。
第二	P88・14〈今井四郎〉〜P90・9〈駆け給ふ。〉	木曽殿は、今井と二騎だけになって、ふと気弱な言葉を漏らすが、今井は、木曽殿を励まして、名誉の自害を勧める。今井と一緒の討ち死にを願った木曽殿だったが、今井の懇願で、自害するべく粟津の松原へ向かう。
第三	P90・10〈今井四郎〉〜P91・8〈手も負はず。〉	今井は、自害する木曽殿を援護するために、ただ一騎で敵を迎え打ち、最後の奮闘をし続けるのだった。
第四	P91・9〈木曽殿は〉〜終わり	木曽殿は粟津の松原へ向かうが、深田に馬の脚を取られて、今井のほうを振り返ったところを、石田の次郎主従に討たれてしまう。それを見て、今井は壮烈な自害を遂げた。

品詞分解と現代語訳

①木曽左馬頭、その日の装束には、赤地の錦の直垂に唐綾威の鎧着て、鍬形打つ
代｜格助・体修｜格助・体修｜格助・体修｜係助・区別｜格助・体修｜格助・資格｜係助・区別｜格助・体修｜格助・体修

たる甲の緒締め、いかもの作りの大太刀はき、石打ち
存体｜格助・体修｜格助・体修｜マ下二・用｜格助・体修｜格助・体修｜カ上一・用｜接助・単接｜カ四・用

の矢の、その日のいくさに射て
格助・体修｜格助・同格｜代｜格助・体修｜格助・体修｜格助・時間｜ヤ上一・用｜接助・単接

少々残つたるを、頭高に負ひなし、重籐の弓持つ
副｜ラ四・用(促音)｜存・体｜格助・対象｜形動ナリ・用｜サ四・用｜格助・体修｜タ四・用(促音)

て、聞こゆる木曽の鬼葦毛と いふ馬の、きはめて
接助・単接｜ヤ下二・体｜格助・体修｜格助・引用｜八四・体｜格助・同格｜副

太う たくましい に、黄覆輪の鞍置いて ぞ
形ク・用(ウ音)｜形シク・体(イ音)｜格助・対象｜格助・体修｜カ四・用(イ音)｜接助・単接｜係助・強意(係)

乗つ たり ける。②鐙踏ん張り立ち上がり、大音声を上げ
ラ四・用(促音)｜存・用｜過・体(結)｜ラ四・用｜ラ四・用｜格助・対象｜ガ下二・用

て 名乗り ける は、
接助・単接｜ラ四・用｜過・体｜係助・提示

「昔は 聞き けん ものを、木曽の冠者、今は 見る
係助・区別｜カ四・用｜過推・体｜接助・逆確｜格助・体修｜係助・区別｜マ上一・終

らん、左馬頭兼伊予守朝日の将軍源義仲 ぞ や。甲斐の
現推・終｜係助・強意｜間助・呼掛｜格助・体修

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

①木曽左馬頭は、その日の装束として、赤地の錦の直垂に唐綾威の鎧を着て、鍬形を打ち付けた甲の緒を締め、いかもの造りの大太刀を腰につけ、石打ちの矢で、その日の戦で射て少しだけ射残したのを、背に高々と負って、重籐の弓を持って、名だたる木曽の鬼葦毛という馬で、極めて太くたくましいのに黄覆輪の鞍を置いて乗っていた。②鐙を踏ん張って立ち上がり、大音声を上げて名乗って言うには、

「昔は（うわさに）聞いたことだろうが、木曽の冠者を、今は（目の当たり）見ているであろう、左馬頭兼伊予守、朝日の将軍源義仲であるぞ。甲斐

一条次郎（いちでうのじらう）と　こそ　聞け（き）。　互ひに（たがひに）　よい　敵（かたき）ぞ。　義仲（よしなか）

格助・引用　係助・強意（係）　カ四・已・結　副　形ク・体（イ音）　係助・強意

討つ（う）　て　兵衛佐（ひやうゑのすけ）　に　見（み）せよ　や。」

タ四・用（促音）　接助・単接　格助・対象　サ下二・命　間助・呼掛

とて、をめい　て　駆（か）く。　③一条次郎（いちでうのじらう）、

格助・引用　カ四・用（イ音）　接助・単接　カ下二・終

「ただ今（いま）　名乗（なの）る　は　大将軍（だいしやうぐん）　ぞ。　あます　な　者（もの）ども、　もらす

副　ラ四・体　係助・提示　係助・強意　サ四・終　終助・禁止　サ四・終

な　若党（わかたう）、討（う）てや。」

終助・禁止　タ四・命　間助・呼掛

とて、大勢（おほぜい）　の　中（なか）　に　取りこめ　て、　我（われ）　討つ取ら（とら）　ん　と

格助・引用　格助・体修　格助・場所　マ下二・用　接助・単接　代　ラ四・未　意・終　格助・引用

ぞ　進（すす）み　ける。　④木曽三百余騎（きそさんびやくよき）、六千余騎（ろくせんよき）　が　中（なか）　を　縦（たて）さま、

係助・強意　マ四・用　過・体（結）　格助・体修　格助・経場

横さま、蜘蛛手（くもで）、十文字（じふもんじ）　に　駆け割つ（かけわ）　て、　後ろ（うし）　へ　つつと

格助・状態　ラ四・用（促音）　接助・単接　格助・方向　副

出で（い）　たれ　ば、　五十騎（ごじつき）　ばかり　に　なり　に　けり。　⑤そこ

ダ下二・用　完・已　接助・順偶　副助・程度　格助・変化　ラ四・用　完・用　過・終　代

を　破つ（やぶ）　て　行く（ゆ）　ほど　に、　土肥二郎実平（とひのじらうさねひら）、二千余騎（にせんよき）　で

格助・対象　ラ四・用（促音）　接助・単接　カ四・体　格助・時間　格助・手段

支へ（さき）　たり。　⑥それ　を　も　破つ（やぶ）　て　行く（ゆ）　ほど　に、

ハ下二・用　存・終　代　格助・対象　係助・同類　ラ四・用（促音）　接助・単接　カ四・体　格助・時間

あそこ　で　は　四（し）、五百騎（ごひやくき）、ここ　で　は　二（に）、三百騎（さんびやくき）、百四（ひやくし）、

代　格助・場所　係助・区別　代　格助・場所　係助・区別

の一条次郎と聞いた。互いにとってよい相手だぞ。義仲を討ち取って兵衛佐に見せよ。」

と言って、大声で叫んで馬を走らせる。

③一条次郎は、

「今名乗ったのは大将軍だぞ。逃がすなよ者ども、討ちもらすな若党よ、討ち取れ。」

と言って、（義仲勢を）大勢の中に取り囲んで、我こそ討ち取ってやろうと思って進んで来た。④木曽の三百余騎は、（敵の）六千余騎の中を縦に、横に、八方に、十文字にと駆け破って、（敵の軍勢の）後ろへつっと抜け出たところ、五十騎ほどになってしまった。⑤そこを打ち破って進んで行くうちに、土肥二郎実平が、二千余騎で敵を防ぎ止めている。⑥それをも打ち破って（進んで）行くうちに、あちらでは四、五百騎、こちらでは二、三百騎、百四、五十騎、百騎ほどの（敵の）中を駆け破り駆け破りして行くうちに、（義仲勢は）主従五騎になってしまった。⑦（その）五騎のうちまで巴は討たれなかった。⑧木曽殿は、

五十騎、百騎ばかりが中を駆け割り駆け割り行くほどに、主従五騎にぞなりにける。⑦五騎がうちまで巴は討たれざりけり。⑧木曽殿、

「おのれは、疾う疾う、女なればいづちへも行け。我は討ち死にせんと思ふなり。もし人手にかからば自害をせんずれば、木曽殿の最後のいくさに、女を具せられたりけりなんど、言はれん事も係助・区別 形ク・用(ウ音) 形ク・用(ウ音) 断・已 接助・順理 代 格助・方向 格助・対象 ラ四・未 接助・順仮 格助・対象 サ変・未 推・已 接助・順理 格助・主格 格助・時間 格助・体修 係助・同類 ラ変・体 適・未 打・終 副助・例示 八四・未 受・未 仮・体 尊・用(敵→義仲) 存・用 過・終

しかるべからず。」

と のたまひけれども、なほ落ちも行かざりける が、あまりに言はれ奉つて、

「あつぱれ、よからう敵がな。最後のいくさし て見せ奉らん。」

係助・逆確 副 八四・未 受・用 補動・ラ四・用(促音)(謙)語り手→義仲 接助・単接 格助・引用 八四・用(尊)語り手→義仲 過・已 接助・逆確 副 タ上二・用 係助・強意 カ四・未 打・用 過体 感 形ク・未 婉・体(ウ音) 終助・願望 格助・体修 サ変・用 接助・単接 サ下二・用 補動・ラ四・未(謙)巴→義仲 意・終

「そなたは、早く早く、女なのだから、どこへでも（落ちて）行け。私は討ち死にしようと思うのだ。もし人手にかかるならば自害をするつもりだから、木曽殿が最後の戦に、女を連れていらっしゃっていたなどと、言われるとしたら、そんなこともよろしくないだろう。」

とおっしゃったけれども、（巴は）なおも落ちて行かなかったが、あまりに（何度も）言われ申して、

「ああ、戦うにふさわしいような敵がいてほしい。最後の戦をしてお見せ申し上げよう。」

とて、控へ　たる　ところ　に、　武蔵の国　に　聞こえ　たる　大力、
格助・引用　八下二・用　存・体　格助・場所　格助・場所　ヤ下二・用　存・体
恩田八郎師重、三十騎　ばかり　で　出で来　たり。　⑨巴、　その　中
格助・引用　副助・程度　格助・状態　カ変・用　完・終　代　格助・体修
へ　駆け入り、　恩田八郎　に　押し並べ　て、　むずと　取つ
格助・方向　ラ四・用　格助・対象　バ下二・用　接助・単接　副　ラ四・用(促音)
て　引き落とし、　わが　乗つ　たる　鞍　の　前輪　に
接助・単接　サ四・用　代　格助・主格　ラ四・用(促音)　存・体　格助・体修　格助・対象
押しつけ　て、　ちつとも　はたらかさ　ず、　首　ねぢ切つ　て　捨て
カ下二・用　接助・単接　副　カ四・未　使・未　打・用　ラ四・用(促音)　接助・単接　タ下二・用
てんげり。　⑩その　の　後、　物の具　脱ぎ捨て、　東国　の　方
連語(完・用(撥音)＋過・終)　代　格助・体修　タ上二・用　係助・強意(係)　カ四・体(結)　タ下二・用　格助・体修
へ　落ち　ぞ　行く。　⑪手塚太郎　討ち死にす。　手塚別当　落ち
格助・方向　タ上二・用　係助・強意(係)　カ四・体(結)　サ変・終　タ上二・用
に　けり。
完・用　過・終

⑫今井四郎、　木曽殿、　主従　二騎　に　なつ　て
格助・変化　ラ四・用(促音)　接助・単接

のたまひ　ける　は、
八四・用(尊・語り手→義仲)　過・体　係助・提示

「日ごろ　は　何と　も　おぼえ　ぬ　鎧　が　今日　は
係助・区別　代　格助・引用　係助・強意　ヤ下二・未　打・体　格助・主格　係助・区別

重う　なつ　たる　ぞ　や。」
形ク・用(ウ音)　ラ四・用(促音)　完・体　係助・強意　間助・詠嘆

と言って（馬を）とどめている所に、武蔵の国で有名な剛力の武者、恩田八郎師重が、三十騎ほどで出て来た。⑨巴は、その中へ駆け入って、恩田八郎に（馬を）押し並べて、むんずとつかんで引き落とし、自分が乗っている（馬の）鞍の前輪に押さえつけて、全く身動きさせずに、首をねじ切って捨ててしまった。⑩その後、鎧甲を脱ぎ捨てて、東国の方へ落ちて行った。⑪（生き残りの五騎のうち）手塚太郎は討ち死にした。手塚の別当は落ちて行った。

⑫今井四郎と義仲とが、主従二騎だけになって、（義仲が）おっしゃったことには、

「これまではなんとも思わない鎧が、今日は重くなったことだ。」

今井四郎　申し　ける　は、
サ四・用(謙)語り手→義仲　過・体　係助・提示

「御身　も　いまだ　疲れ　させ　給は　ず。　御馬　も　弱り　候は　ず。　何に　よつ　て　か、　一領　の　御着背長　を　重う　は　おぼしめし　候ふ　べき。　それ　は　御方　に　こそ　さ　は　候は　ね　ば、　臆病　で　兼平　一人　候ふ　とも、　余　の　武者　千騎　と　おぼしめせ。　矢　七つ　八つ　候へ　ば、　しばらく　防ぎ矢　つかまつら　ん。　あれ　に　見え　候ふ、　粟津の松原　と　申す。　あの　松　の　中で　御自害　候へ。」
係助・列挙　副　ラ下二・未　尊・用(兼平→義仲)　補動・八四・未(尊)→義仲　打・終　係助・列挙　副　ラ四・用　補動・八四・未(丁)→義仲　打・終　代　格助・対象　ラ四・用(促音)　接助・理由　係助・反語(係)　格助・対象　形ク・用(ウ音)　係助・強意　サ四・用(尊)→義仲　格助・主格　格助・場所　係助・提示　代　格助・理由　係助・強意(係)　副　係助・強意　八四・終(謙)→義仲　接助・逆仮　八四・已(丁)→義仲　格助・体修　格助・引用　サ四・命(尊)→義仲　ラ四・未(謙)→義仲　意・終　代　格助・方向　ヤ下二・用　格助・引用　サ四・終(謙)→義仲　代　格助・体修　八四・命(丁)→義仲　格助・体修　格助・場所　格助・体修　格助・引用　タ四・用(促音)　接助・単接　カ四・体　格助・時間　副　格助・体修

（と言ったので、）今井四郎が申したことには、

「お体もまだお疲れになってはいらっしゃいません。御馬も弱ってはおりません。どうして（僅か）一領の御着背長を重いとお思いになるはずがありましょうか。それは、お味方にご軍勢がおりませんので、気後れからそのようにお感じになるのでしょう。兼平一人だけがいるとしましても、他の武者が千騎だとお思いください。（私には）矢が七、八本残っておりますので、しばらく防ぎ矢をいたしておりましょう。あそこに見えておりますのは、粟津の松原と申します。あの松林の中で御自害なさってください。」

と言って、（馬に）鞭打ってゆくうちに、また新手の（敵の）武者が五十騎ほど出てきた。

ばかり　出で来たり。
副助・程度　カ変・用　完・終

⑬「君は　あの　松原へ　入らせ
係助・区別　代　格助・体修　格助・場所　ラ四・未　尊・用（兼平→義仲）

給へ。　兼平は　この　敵　防ぎ　候は　ん。」
補動・八四・命（尊）兼平→義仲　係助・区別　代　格助・体修　ガ四・用　補動・八四・未（丁）兼平→義仲　意・終

と　申し　けれ　ば、　木曽殿　の　たまひ　ける　は、
格助・引用　サ四・用（謙）語り手→義仲　過・已　接助・順偶　八四・用（尊）語り手→義仲　過・体　係助・提示

「義仲　都　にて　いかにも　なる　べかり　つる　が、　これ　まで
格助・場所　副　ラ四・終　当・用　完・体　接助・逆確　代　副助・範囲

逃れ来る　は、　なんぢ　と　一所　で　死な　ん　と　思ふ　た
カ変・体　係助・区別　代　格助・相手　格助・場所　ナ変・未　意・終　格助・引用　八四・体

め　なり。　ところどころ　で　討たれ　ん　より　も、　ひとところ
断・終　格助・場所　タ四・未　受・未　婉・体　格助・比基　係助・強意

で　こそ　討ち死に　を　も　せ　め。」
格助・場所　係助・強意（係）　格助・対象　係助・強意　サ変・未　意・已（結）

と　て、　馬　の　鼻　を　並べ　て　駆け　ん　と　し
格助・引用　格助・体修　格助・対象　バ下二・用　接助・単接　カ下二・未　意・終　格助・引用　サ変・用

給へ　ば、　今井四郎　馬　より　飛び降り、　主　の　馬
補動・八四・已（尊）語り手→義仲　接助・順理　格助・起点　ラ上二・用　格助・体修

の　口　に　取りつい　て　申し　ける　は、
格助・体修　格助・対象　カ四・用（イ音）　接助・単接　サ四・用（謙）語り手→義仲　過・体　係助・提示

「弓矢取り　は、　年ごろ、　日ごろ　いかなる　高名　候へ　ども、
係助・提示　形動ナリ・体　八四・已（丁）兼平→義仲　接助・逆恒

⑬（兼平は）「御主君はあの松原へお入りください。兼平はこの敵を防いでおりましょう。」

と申し上げたところ、木曽殿がおっしゃるには、

「義仲は都でどのようにでもなるはずであったが、これまで逃れてきたのは、お前と同じ所で死のうと思うからなのだ。別々の所で討たれるよりも、同じ場所で討ち死にをもしよう。」

と言って、（兼平と）馬の鼻を並べて（敵に向かって）駆け入ろうとなさるので、今井四郎は馬から飛び降り、主君の馬の口に取りついて申し上げたことには、

「弓矢取りというものは、長年常日頃どのような手柄を立てておりまして

最後　の　とき　不覚し　つれ　ば、　長き　きず　に　て
格助・体修　サ変・用　完・已　接助・順恒　形ク・体　断・用　接助・単接

候ふ　なり。　御身　は　疲れ　させ　給ひ
補動・八四・体(丁)兼平→義仲　断・終　係助・区別　ラ下二・未　尊・用(兼平→義仲)　補動・八四・用(尊)兼平→義仲

て　候ふ。　続く　勢　は　候は　ず。　敵　に
接助・単接　補動・八四・終(丁)兼平→義仲　カ四・体　係助・区別　八四・未(丁)兼平→義仲　打・終　格助・受対

押し隔て　られ、　言ふかひなき　人　の　郎等　に　組み落とさ　れ
タ下二・未　受・用　形ク・体　格助・体修　格助・受対　サ四・未　受・未

させ　給ひ　て　討た　れ　させ
尊・用(兼平→義仲)　補動・八四・用(尊)兼平→義仲　接助・単接　タ四・未　受・未　尊・用(兼平→義仲)

給ひ　な　ば、　『さばかり　日本国　に　聞こえ　それがし
補動・八四・用(尊)兼平→義仲　完・未　接助・順仮　副　格助・場所　ヤ下二・未　連語(格助・対象＋係助・強意)　代

させ　給ひ　つる　木曽殿　を　ば、　なんど
尊・用(敵)→義仲　補動・八四・用(尊)(敵)→義仲　完・体　格助・体修

が　郎等　の　討ち　奉つ　たる。』　ただ
格助・主格　タ四・用　補動・ラ四・用(促音)(謙)(敵)→義仲　完・体　副助・例示

申さ　ん　こと　こそ　口惜しう　候へ。
サ四・未(謙)兼平→義仲　婉・体　係助・強意(係)　形シク・用(ウ音)　補動・八四・已(結)(丁)兼平→義仲

あの　松原　へ　入ら　せ　給へ。」
代　格助・体修　格助・方向　ラ四・未　尊・用(兼平→義仲)　補動・八四・命(尊)兼平→義仲

と　申し　けれ　ば、　木曽、
格助・引用　サ四・用(謙)語り手→義仲　過・已　接助・順理

「さらば。」
接

も、最後のときに不覚をとってしまうと、いつまでも（お名前の）傷となるものです。お体はお疲れになっております。（後に）続く（味方の）軍勢はおりません。敵に（私との間を）押し隔てられ、取るに足らない郎等ふぜいに組み（馬から）落とされなさって、討たれておしまいになったなら、『あれほど日本国に有名でいらっしゃった木曽殿をば、誰それの郎等がお討ち取り申した。』などと（世間で）申すようなことは、残念至極でございます。まっすぐあの松原にお入りになってください。」

と申し上げたので、木曽は、

「それならば。」

と て、　粟津の松原へ　ぞ　駆け　給ふ。
格助・引用　格助・方向　係助・強意（係）　カ下二・用　補動・八四・体（結）（尊）語り手→義仲

⑭今井四郎　ただ　一騎、　五十騎　ばかり　が　中へ　駆け入り、　鐙
副　副助・程度　格助・体修　格助・方向　ラ四・用

踏ん張り　立ち上がり、　大音声　上げ　て　名乗り　ける　は、
ラ四・用　ラ四・用　ガ下二・用　接助・単接　ラ四・用　過・体　係助・提示

「日ごろ　は　音　に　も　聞き　つ　らん、　今　は　目
係助・区別　格助・対象　係助・同類　カ四・用　強・終　現推・終　係助・区別

に　も　見　給へ。　木曽殿　の　御乳母子、　今井四郎
格助・対象　係助・同類　マ上一・用　補動・八四・命（尊）兼平→敵　格助・体修

兼平、　生年　三十三　に　まかりなる。　さる　者　あり　と　は、
係助・同類　係助・区別　格助・変化　ラ四・終（謙）兼平→敵　連　ラ変・終　格助・引用　係助・提示

鎌倉殿　まで　も　知ろしめさ　れ　たる　らん　ぞ。　兼平
副助・範囲　係助・強意　サ四・未（尊）兼平→頼朝　尊・用（兼平→頼朝）　存・体　現推・体　係助・強意

討つ　て　見参　に　入れよ。」
タ四・用（促音）　接助・単接　格助・対象　ラ下二・命

と て、　射残し　たる　八筋　の　矢　を、　さしつめ　引きつめ
格助・引用　サ四・用　完・体　格助・体修　格助・対象　マ下二・用　マ下二・用

さんざんに　射る。　⑮死生　は　知ら　ず、　やにはに　敵　八騎　射落とす。
形動ナリ・用　ヤ上一・終　係助・区別　ラ四・未　打・用　副　サ四・終

⑯その　後　打ち物　抜い　て、　あれ　に　馳せ合ひ、　これ
代　格助・体修　カ四・用（イ音）　接助・単接　代　格助・場所　八四・用　代

に　馳せ合ひ、　切つ　て　回る　に、　面　を　合はする　者
格助・場所　八四・用　ラ四・用（促音）　接助・単接　ラ四・体　接助・単接　格助・対象　サ下二・体

と言って、粟津の松原へ馬を走らせておいでになる。

⑭今井四郎はただ一騎で、五十騎ほど（の敵）の中に駆け入って、鐙を踏ん張って（馬の鞍から）立ち上がり、大音声を上げて名乗ったことには、

「日頃は（私のことは）うわさにも聞いていることだろうが、今はその目で御覧なされよ。木曽殿の御乳母子、今井四郎兼平、当年三十三歳になり申す。そういう者がいるとは、鎌倉殿でも御存じのことでありましょうぞ。兼平を討ち取って（その首を、鎌倉殿に）お目にかけよ。」

と言って、射残した八本の矢を、（弓に）つがえては引きつがえては引き、矢継ぎ早に射る。⑮生死のほどは分からないが、たちどころに敵を八騎射落とした。⑯その後は、太刀を抜いて、あちら（の敵）と馳せ合い、こちらと馳せ合いして、斬って回ると、面と向かい合（って戦）う者はいない。⑰分捕りもたくさんにしたのだった。⑱

ぞ　なき。　⑰分捕り　あまた　し　たり　けり。　⑱ただ、
係助・強意(係)　形ク・体(結)　副　サ変・用　完・用　過・終　副

「射とれ　や。」
ラ四・命　間助・呼掛

と て、　中 に　取りこめ、　雨 の　降る　やうに　射　けれ　ども、
格助・引用　格助・場所　マ下二・用　格助・主格　ラ四・体　比用　ヤ上一・用　過・已　接助・逆確

鎧　よけれ　ば　裏　かか　ず、　あき間　を　射　ね　ば　手
形ク・已　接助・順理　カ四・未　打・用　格助・対象　ヤ上一・未　打・已　接助・順理

も　負は　ず。
係助・強意　八四・未　打・終

⑲木曽殿　は　ただ　一騎、　粟津の松原　へ　駆け
係助・区別　副　格助・方向　カ下二・用

給ふ　が、　正月二十一日、　入相　ばかり　の　こと　なる
補動・八四・体(尊)語り手→義仲　接助・単接　副助・程度　格助・体修　断・体

に、　薄氷　は　張つ　たり　けり、　深田　あり　と　も
接助・添加　係助・提示　ラ四・用(促音)　存・用　過・終　ラ変・終　格助・引用　係助・同類

知ら　ず　して、　馬　を　ざつと　うち入れ　たれ　ば、　馬　の
ラ四・未　打・用　接助・理由　格助・対象　副　ラ下二・用　完・已　接助・順偶　格助・体修

頭　も　見え　ざり　けり。　⑳あふれ　ども　あふれ　ども、　打て
係助・同類　ヤ下二・未　打・用　過・終　ラ四・已　接助・逆確　ラ四・已　接助・逆確　タ四・已

ども　打て　ども　はたらか　ず。　㉑今井　が　行方　の　おぼつかな
接助・逆確　タ四・已　接助・逆確　カ四・未　打・終　格助・体修　格助・体修

さ　に、　振り仰ぎ　給へ　る　内甲　を、　三浦　の
格助・理由　ガ四・用　補動・八四・已(尊)語り手→義仲　完・体　格助・対象　格助・体修

（敵は）ひたすら、

「射殺せよ。」

と言って、中に取り囲んで、雨が降るように（矢を）射たけれども、鎧がよいので（矢は）裏まで届かず、（鎧の）透き間を射当てないので、傷も負わない。

⑲木曽殿はただ一騎で、粟津の松原に駆け入りなさったが、正月二十一日の日暮れ時分のことであるうえに、薄氷が張ってはいるし、深田があるとも知らないで、馬をざっと乗り入れたところ、（深田に沈み込んでしまい）馬の頭も見えなくなった。⑳（鐙で馬の腹を蹴りつけて）あおってもあおっても、（また、鞭で）打っても打っても、（馬は）動かない。㉑今井の行方が気がかりで、（義仲が）振り仰ぎ（後ろを御覧）なさった内甲を、三浦の石田次郎為久が、追いすがりざま（弓を）引き絞って、ぴゅう、ぷつっと射止めた。㉒深手なので、（義仲が、甲の）

石田次郎為久、追つかかつて　よつぴいて　ひやうふつと　射る。
ラ四・用(促音)　接助・単接　カ四・用(イ音)　接助・単接　副　ヤ上一・終

㉒痛手なれば、真向を　馬の　頭に　当てて、
断・已　接助・順理　格助・対象　格助・体修　格助・対象　タ下二・用　接助・単接

うつぶし給へる　ところに、石田が　郎等二人
サ四・用　補動・八四・已(尊)語り手→義仲　完・体　格助・時間　格助・体修

落ち合うて、つひに木曽殿の　首をば　取つ
八四・用(ウ音)　接助・単接　副　格助・体修　連語(格助・対象＋係助・強意)　ラ四・用(促音)

てんげり。㉓太刀の　先に　貫き、高く　さし上げ、大音
連語(完・用(撥音)＋過・終)　格助・体修　格助・場所　カ四・用　形ク・用　ガ下二・用

声を　上げて、
格助・対象　ガ下二・用　接助・単接

「この　日ごろ　日本国に　聞こえ　させ　給ひ
代　格助・体修　格助・場所　ヤ下二・未　尊・用(為久→義仲)　補動・八四・用(尊)為久→義仲

つる　木曽殿を　をば、三浦の　石田次郎為久が　討ち
完・体　連語(格助・対象＋係助・強意)　格助・体修　格助・主格　タ四・用

奉つたるぞ　や。」
補動・ラ四・用(促音)(謙)為久→義仲　完・体　係助・強意　間助・呼掛

と　名乗り　けれ　ば、今井四郎　いくさ　し　ける　が、これ
格助・引用　ラ四・用　過・已　接助・順理　サ変・用　過・体　接助・逆確　代

を　聞き、
格助・対象　カ四・用

「今　は　誰を　かばはん　とて　か、　いくさ　を
係助・区別　代　格助・対象　八四・未　意終　格助・引用　係助・反語(係)　格助・対象

真っ向を馬の頭に当ててうつ伏せになられたところに、石田の郎等が二人（その場に）走り寄って、ついに木曽殿の首を取ってしまったのだった。㉓（石田が、義仲の首を）太刀の先に貫いて高く差し上げ、大音声を上げて、

「この日頃日本国中に知れ渡っていらっしゃった木曽殿をば、三浦の石田次郎為久がお討ち申したぞ。」

と（勝ち）名乗りを上げたので、今井四郎は（敵の軍勢と）戦っていたところが、これを聞いて、

「今となっては、誰をかばおうとて戦をもする必要があろうか。これを御

もすべき。これを見給へ、東国の殿ばら、日本一の剛の者の自害する手本。」

係助・強意 | サ変・終 | 当・体(結) | 代 | 格助・対象 | マ上一・用 | 補動・八四・命(尊・兼平→敵) | 格助・体修 | 格助・体修 | 形動ナリ・語幹 | 格助・体修 | 格助・主格 | サ変・体 | 格助・体修

と言って、(自分の)太刀の先を口にくわえて、馬から真っ逆さまに飛んで落ち、(自らの太刀に)差し貫かれて死んでしまった。㉔こうして、粟津の戦いという(華々しい)ものはなかったのであった。

と、太刀の先を口に含み、馬より逆さまに飛び落ち、貫かつてぞ失せにける。㉔さてこそ粟津のいくさはなかりけれ。

格助・引用 | 格助・体修 | 格助・対象 | 格助・場所 | マ四・用 | 格助・起点 | 形動ナリ・用 | 夕上二・用 | ラ四・用(促音) | 接助・単接 | 係助・強意(係) | サ下二・用 | 完・用 | 過・体(結) | 副 | 係助・強意(係) | 格助・体修 | 係助・区別 | 形ク・用 | 過・已(結)

学習活動のポイント

■導入

学習活動のポイント

❶ 源平の合戦について、知っていることをあげる。
❷ 源平の合戦の経緯を説明し、ここでは誰と誰が戦っているのかを明らかにする。
❸「平家物語」の中で木曽義仲はどのような武将として描かれているか調べる。知技(1)ア

❶中学で習ったことや、アニメ、漫画、ドラマ化されたものなどから、知っている人物名をあげさせる。

❷歴史の知識の補足説明→平家を都から追い出したのは義仲であり、その専横を嫌う後白河法皇が、頼朝に義仲を討つように命じ、頼朝は弟の義経を義仲討伐に差し向けた。ここでは源義経対木曽義仲という源氏同士の戦いであることを確認しておく。
❸「倶利迦羅落」では、知略に長けた大将としての義仲が、「猫間」ではマナーも知らぬ田舎者としての義仲が描かれる。そのような義仲の異なる面が描かれているところと比較しながら読ませるとよい。

【評価】 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

■展開

学習活動のポイント

❶「古文を読むために6」を参考にし、頻出の敬語の意味と用法、その他の重要語句を古語辞典で調べる。知技(1)ウ・(2)ウ
→**「言葉と表現」1**
❷ 音便や敬語の読み方に注意し、全文を正確に音読する。知技(1)エ・(2)エ 思判表B(1)ア
→**「学習のポイント」1**
❸ 義仲の装束や物の具について調べ、合戦のイメージをつかむ。

❹ 義仲についての記述と巴・兼平についての記述をそれぞれ文中から抜き出し、そこに表れている心情を読み取る。思判表B(1)イ 主態
→**「言語活動」1**
(1) 巴との別れのときの義仲と巴
(2) 主従二騎になったときの義仲と兼平
(3) 義仲と兼平のそれぞれの最期を遂げたとき
以上の部分に、どのような心情が表れているか、考える。

❶本文中に敬語が多いので、スムーズな読みと理解のために先に

語句の解説をしておく。尊敬語・謙譲語・丁寧語の区別をしておくことで、主語を考える手がかりになる。ただ辞書を引くだけでなく、多義語は文中での意味をよく考えさせる。

【評価】 敬語の意味と用法、重要語句を調べることを通して、我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、確認する。

・敬語の意味と用法、重要語句を調べることを通して、古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、確認する。

❸ 必要なら最初に範読をする。特に促音便は「つ」の表記が大きいままなので注意する。

【評価】 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、確認する。

・正確に音読することを通して、時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、確認する。

・正確に音読することを通して、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、確認する。

❹ 平安末期のこのころは、鎧・甲・太刀などが最も華やかな作りであった。動きの多い合戦場面で、華やかな物の具をイメージすることから、絵画的な楽しさも感じることができる。便覧やビデオ教材などがあれば活用したい。これらの装束は色や素材など、地位によって違いがあり、このいでたちが敵の地位の判断基準ともなったのである。

❺ (1)　巴との別れのとき

義仲「おのれは、疾う疾う、女なれば…」→巴への愛情

巴　なほ落ちも行かざりけるが、あまりに言はれ奉つて、「あつぱれ、よからう敵がな。…」→義仲への愛情

〔愛による生がテーマ〕

(2)　主従二騎になったとき

義仲「日ごろは何ともおぼえぬ鎧が…」

「…一所でこそ討ち死にをもせめ。」

兼平「…臆病でこそさはおぼしめし候へ。」

馬より飛び降り、主の馬の口に取りついて…

(3)　義仲と兼平のそれぞれの最期のとき

義仲「さらば。」とて

兼平　大音声あげて名乗り

義仲が深田にはまり、最期を遂げたとき

義仲　あふれどもあふれども…今井が行方のおぼつかなさに

兼平「今はたれをかばはんとてか、いくさをもすべき。」

義仲→乳母子兼平への信頼、兼平→主の名誉を思う忠誠

〔愛による死がテーマ〕

まず、それぞれの場面で、それぞれの人物についてどのように書かれているか、文中から抜き出させる。巴に対してはあくまで武士の名誉を守ろうとする義仲だったが、これは巴を逃がすための説得であったと思われる。義仲にとっては巴は女性であり、命を守るべき相手であった。その一方で、兼仲と二人に

なったとき初めて弱音を吐くところに注意させる。乳母子の兼平は、義仲にとって死を共にする相手なのである。しかし、兼平はあくまで主君の名誉を守ろうと必死になる。また、義仲が敵に討たれたのも、兼平の身を案じて振り返ったところを射抜かれたということ、兼平は義仲が討たれたことを知って自ら自害したことから、二人の心の結びつきの強さを感じ取らせたい。

【評価】 登場人物の心情を読み取ることを通して、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、確認する。

・進んで音読する、平曲を聞くなどを通して「平家物語」特有の表現を味わい、軍記物語の文体の特徴について理解し、学習課題に沿って、それぞれの場面での登場人物の心情を深く読み取ろうとしているか、分析する。

■ まとめと発展

学習活動のポイント

❶ 前の時間にまとめた義仲と巴・兼平についての記述から、これらがどのような人物として描かれているか考える。また、彼らの言動の中で共感するところがあるか話し合う。 主態

❷「古文の窓5」も参考にし、音便や文の調子に注意しながら、内容をふまえて朗読する。 知技(2)オ 思判表B(1)ア

❸ 参考「祇園精舎」を読み、「木曽の最期」から読み取れる「諸行無常」「盛者必衰」について考える。 思判表B(1)エ

❶「平家物語」が語り物という形で大衆に親しまれてきたことをふまえ、義仲はなぜ英雄なのか、巴は？　兼平は？　と考えさせる。最期のときに女を連れているのは恥になることや、主君を守るために命をかけることは、今の生徒には受け入れにくいかもしれないが、それはそれで素直な感想としてよい。対象は変わっても「命をかけて守りたいもの」は今も昔も変わらずにあるのではないかと、問いかけてみたい。

・感想を発表する、言語活動のワークシートを通して、それぞれの場面での登場人物の心情を深く読み取ろうとしているか、分析する。

❷ 内容を理解したことで、よりなめらかな読みが可能になり、それが文章を味わうことにつながるように朗読させる。語り物として伝えられた「平家物語」の流麗な調子を少しでも体感できるとよい。九四ページのQRコードから平曲を聞かせるのも効果的だろう。

【評価】 音読を通して、和漢混交文など歴史的な文体の変化について理解を深めているか、確認する。

・朗読する、平曲を聞くなどを通して「平家物語」特有の表現を味わい、軍記物語の文体の特徴について理解しようとしているか、確認する。

❸ 冒頭の「祇園精舎」で物語全体を貫く思想が提示され、その後

に実例が語られるという構成になっており、「木曽の最期」もその実例の一つであることを理解させる。「倶利迦羅落」で義仲が平家を討ったときの勢いある姿と比較することで「盛者必衰」が感じ取れるのではなかろうか。現代の社会状況でも「盛者必衰」は至る所に見られることを考えさせる。

【評価】「諸行無常」について考えることを通して、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、確認する。

指導上の注意点と発問例

●八六ページ

問 **義仲の装束はどのような印象を与えるか。**

答 大将軍らしい威厳と、英雄の持つ華やかさを感じさせる。

補 赤地の錦の直垂に唐綾威の鎧という華やかな衣装に、甲も太刀も弓矢も大将にふさわしい立派なものを持っている。たくましい馬に置いた鞍も豪華なものである。最後の合戦にふさわしいいでたちであるが、武士にとっての晴れの場といえる戦においては、それぞれの立場にふさわしいいでたちがあり、それで敵の立場を判断していた。

●八七ページ

問 **「頭高に」（12行目）とは、どのような様子を述べているか。**

答 「語句の研究」参照。

問 **「聞こゆる」（12行目）は、ここではどのような意味か。**

答 「評判が高い。名だたる」「世に知れている」の意。

問 **「鬼葦毛」（13行目）の「鬼」はどのような意味合い（印象）のある接頭語か。**

答 「語句の研究」参照。

問 **「あますな」（6行目）の「あます」とは、どのような意味か。**

語句の研究

●八六ページ

10木曽左馬頭　源義仲。源為義の二男義賢の子。二歳のとき、同族の争いで叔父義朝の子義平に父を討たれ、逃れて木曽の中原兼遠に養育された。治承四（一一八〇）年、以仁王の令旨を受けて挙兵し、北陸路から進出して、寿永二（一一八三）年五月、越中礪波山で平家の大軍を破り、七月には平家を追って入京を果たした。しかし、「朝日将軍」と呼ばれて華々しく登場した義仲も、後白河法皇を中心とする貴族政界との対立を生じ、さらに、九州大宰府に一度落ちた後、四国屋島を回復し備中方面に進出した平家に水島の戦いで敗れるなどして、急速に孤立した。同年十二月に鎌倉の頼朝に義仲追討の院宣が下り、頼朝が派遣した範頼・義経軍に討たれたのである。このとき、五万騎をもって入京したとされる義仲軍は、瀬田を守る今井兼平が八百騎、宇治橋に五百騎、下流の淀・一口に三百騎が派遣され、京の義仲は僅か百騎余の手勢を従えるのみと記されている。関東軍六万騎に対して、あまりの凋落ぶりであった。

10その日の装束には…　以下の武装の描写には、堂々と力強い感じの中にも、豪華・華麗な印象がある。武装の描写は、なかなか具体的に想像できるものではないが、身分の高い武将が身につける中国伝来の唐綾威の鎧や石打の矢などで大将軍らしさを演出しているところを読み取りたい。なお、義仲が初めて入京する場面（巻八「山門御幸」）の武装も、ほとんどここと同じで、語り手は義仲のイメージを一貫して描いているようである。装束の描写が詳しいのは、身分や年齢によって材質や色などに違いがあり、お互いにそれを目安に相手の実力をはかって、自分にふさわしい敵か否かを判断していたためでもある。「には」は状態の格助詞「に」＋強調の係助詞「は」から成る連語。

10唐綾威　「唐綾」は中国伝来の、模様を浮き織りにした絹織物。唐綾威はこれを細長くたたみ、鎧の札（鉄または革で作られた小板）をつづりあわせたもの。身分の高い武将が着用した。

10直垂　ここは、鎧直垂のこと。「直垂」は、平安時代末頃から貴族や武家の常服として着用されたが、その小さめのものを鎧の下

問 **「もらす」（6行目）とは、どういう意味ですか。**
答 「語句の研究」参照。

問 **「縦さま、横さま、蜘蛛手、十文字に駆け割って」（8行目）とは、何の、どのような様子か。**
答 「語句の研究」参照。

補 **少人数の木曽軍の、敵の大軍を相手に縦横無尽に駆け回って戦う様子。**
答 敵の大軍をある時は縦に突っ切り、ある時は横に遮り、八方へ広がるかと思えば、縦横に同時に動きと、言葉通りに訳すとこのようになるが、状況に応じて臨機応変に隊形を変え、巧みに攻める様子を表している。戦闘の様子を形容する決まり文句ではあるが、数を示すことでその圧倒的に不利な状況がはっきりと表されている。

問 ●**「主従」とは誰のことか。**
答 木曽義仲、今井四郎、巴、手塚太郎、手塚別当。

問 **「人手にかからば」（15行目）とは、ここではどのような意味か。**
答 敵につかまって殺される。

問 **「しかるべからず。」（1行目）について、**
答 **(1)「べから」の文法的意味を答えよ。**
(2)「しかる」の示す内容を明らかにせよ。
(1)適当　(2)木曽殿が最後の戦に女を連れて

に着用した。特に赤地の錦の直垂は、大将軍が用いるものとされていた。

10 錣形　甲の正面に付けられた、角のように突き出た金属製の飾り。威容を示す。

11 いかもの作りの大太刀　大きく堂々と見えるように作った太刀。「いかもの」は厳めしげに作られたものの意。鎌倉時代以降、刀や鎗などを使った戦いが激しくなるにつれて太刀は長大化した。

11 石打ちの矢の　鷲などの尾の両端の羽（石打ち）を矢羽（矢の上端に付ける羽根）とした戦闘用の矢。大将軍が用いるものとされた。「矢の」の「の」はいわゆる同格の「の」で、「その日の…残つたる」（11）の部分は、「矢」についての補足説明になっている。「木曽の鬼葦毛といふ馬の」（同・12）の「の」も同じ。

12 頭高に　箙（えびら）に矢を入れて背負う際に、左肩の上に高く出して、前から見えるようにするのをいう。

12 負ひなし　「なす」は「あえて…する、意図的に…する」の意を添える補助動詞。

12 重籐の弓　弓の幹に黒漆を塗り、その上に籐を巻きつけたもの。

12 木曽の鬼葦毛　「木曽の」は「木曽に産する」の意。「鬼」は強いことを表す。「葦毛」は馬の毛色で、黒色や濃褐色の毛に白い毛が混じったもの。

13 黄覆輪の鞍　黄覆輪は金覆輪に同じ。周縁を金でふちどりした鞍。

●八七ページ

1 鐙　鞍の両脇にさげ、馬に乗る際に足を踏み掛ける道具。

1 鐙踏ん張り立ち上がり、大音声をあげて名乗りけるは…をめいて駆く　軍記物らしい勇ましい木曽義仲の姿が描かれているところである。名乗りは戦における古くからの風習で、だいたいの形が決まっており、武人としての自分をアピールして、自分にふさわしい好き敵を探し出し、勝負を挑むために行われた。この、敵に向かったときの勇ましさは、後半の、今井四郎と二人になったときとを比較するために、押さえておきたい。

2 昔は…、今は…　「は」は二つ以上のことを対比的に述べる係助詞。

2 木曽の冠者　「冠者」は「元服して冠を着けた若者」のことを言うが、「無位無官の者」の意で言うこともある。義仲は、巻四「源氏揃」で最初に名が出てくるところで

いたと言われること。

問　**「疾う疾う」（14行目）は、どこに掛かるか。**

補　**答**　行け。

「おのれは、女なれば、疾う疾う、いづちへも行け。」となるのが普通であろう。前へ置いたことで「疾う疾う」が強調される。「女なれば」と「いづちへも」が間に入ることに惑わされず、「疾う疾う」は副詞的に働いて、用言に掛かることを思い出すようにする。

●八八ページ

問　**◉「なほ落ちも行かざりけるが」（3行目）とあるが、ここでの巴の心情はどのようなものか。**

答　巴は離れがたい思いだが、何度も説得され、別れを決意する。できれば主従として最後まで一緒に戦いたいという心情。

補　多勢に無勢の中、力を合わせて、最後に残った五人であること。義仲が死を覚悟していることから想像する。

問　**「あまりに」（3行目）を現代語訳しなさい。**

答　何度も

問　**「言はれ奉つて」（4行目）について、**
[中](1)　「れ」の文法的意味を答えよ。
[難](2)　「奉つ」は誰から誰への敬意を表しているか。

答　(1)受身　(2)作者から木曽殿

も、「木曽冠者義仲」と言われている。

2伊予守　伊予（現在の愛媛県）の国主。義仲は無位無官であったが、寿永二（一一八三）年の入京後、後白河法皇によって伊予守に任ぜられた。

2朝日の将軍　巻八「名虎」では、寿永二（一一八三）年八月十日、「木曽は左馬頭になつて、越後の国を賜はる。その上、朝日の将軍といふ院宣を下されけり。」とある。「左馬頭」は当時の記録にあるが、「朝日の将軍」はなく、義仲の自称であろうかと言われる。ただし、寿永三年一月には「征夷大将軍」の院宣を下されている。

3甲斐　現在の山梨県。

3一条次郎　甲斐源氏の武将。頼朝方。

3兵衛佐　兵衛府の次官。ここでは、後に鎌倉幕府初代の将軍となる源頼朝（一一四七年〜一二九九年）のこと。頼朝は平治元年（一一五九）に右兵衛佐に任ぜられた。

5をめいて　「をめく」は大声で叫ぶこと。

6あますな　「あます」は、余分なものとして残す、余らせることで、「取り残す、取り逃がす」の意に用いる。

6もらすな　「もらす」は、水や粒状のものを、隙間や穴から落としたり、こぼしたりすることで、「取りこぼす、取り逃がす」の意に用いる。

9土肥二郎実平　相模の国足柄下郡土肥郷（神奈川県足柄下郡湯河原町）の住人。頼朝が挙兵したときから従った相模平氏の一族で、侍大将格の有力な武将。

10支へたり　「ささふ」（支ふ）は、物を押さえて持ちこたえることで、「敵に応戦して防ぎ止める」意に用いる。

12巴　義仲は信濃の木曽から、身の回りの世話をする女性として巴と山吹の二人を伴って入京した。巴は美貌で武勇に優れ、たびたび手柄を立てたといわれている。

14疾う疾う　早く早く。「疾く疾く」のウ音便形。巴を急かす義仲の気持ちが表れている。

15人手にかからば　「人手にかかるようならば、むしろ自害をしようと思う」。「人手にかからずば」とある異本があり、その場合は前文の「討ち死にせんと思ふ」を受けて「討ち死にしない場合は自害をするつもりだ」となる。いずれにしても「自分はここで死ぬつもりだ」の意。

15木曽殿の最後のいくさに…しかるべからず　「最後のいくさ」に「女を具」すことはな

問　**「あつぱれ」（5行目）という語の成り立ち、用法を述べよ。**

答　「あはれ」を促音化して、語気を強めたもの。（「あはれ」を強く発音し、促音化したもの）。感情を一気に表すときに用い、「ああ」「おう」「すばらしい」などの意を示す。

問　**「よからう敵がな。」（5行目）について、**
[中](1)「よからう」を文法的に説明せよ。
[易](2)「がな」の文法的意味を答えよ。
[中](3)全体を分かりやすく現代語訳せよ。
[難](4)巴がこのように考えたのはなぜか。

答　(1)形容詞「よし」の未然形に婉曲の助動詞「ん」が付いてウ音便化したもの。(2)願望 (3)戦うにふさわしい敵がいてほしい。(4)木曽殿と別れる前に家臣として立派に戦う自分の姿を見せたかったから。

問　**「物の具」（12行目）とは、どのようなものことか。**

答　鎧、甲などの武具。

問　**この場面からうかがわれる巴の人物像はどのようなものか。**

答　女性でありながら戦場で男性と同様に戦うことができ、木曽殿をよく理解している人物。

補　「五騎がうちまで巴は討たれざりけり。」（八七・12）から、多勢に無勢の圧倒的不利の中でも生き残ったことが分かり、義仲はぜいけないのか。「女を具」した状態は武将を中心とする武士団が組織として機能していないことになるから、潔い武人の死を「最後のいくさ」に期している義仲としては、卑怯未練と見られるということであろうか。表向きの理由はともかく、これは、最期まで従者として付き添うつもりである巴を逃がすための、口実の言葉であると考えられる。巴が武人として優れていても義仲にとっては女性であり、やはり助けたいという気持ちがあったのだろう。本文の前段部分で容貌も大変美しいが、「一人当千のつはもの」であり、乗馬も巧みであると紹介された男勝りの巴には、義仲が迷惑と言う表面上の理屈も、その言葉の裏にある愛情も分かったはずである。ここは一方で「平家物語」の構造として、義仲の最期を後世に語り伝える巴がどうしても生き長らえなければならないところなので、その設定のための文言ともいえる。

●八八ページ

1しかるべからず　「しかるべし」は①そうなるよう定まっている（「べし」は当然）。②そうなるのがよい。適当である（「べし」は適当）。ここは②。

4奉つて　「たてまつりて」の音便形「たてまつつて」のつづまった形。

5あつぱれ　「あはれ」を促音化して語気を強めた語。

5よからう　「よからん」の音便形。「ん」は婉曲の用法とみる。

7武蔵の国　現在の埼玉県・東京都および神奈川県の一部。

8恩田八郎師重　諸本によって住国や呼称に異同が多く定め難い。「武蔵の国」ならば大里郡恩田（埼玉県熊谷市）の住人。

10前輪　鞍の前面の山形に高くなっている部分。「後輪」の対。

11はたらかさず　身動きさせず。

11捨ててんげり　「てんげり」は完了の助動詞「つ」連用形＋過去の助動詞「けり」の「てけり」に撥音を挿入し、意味を強めたため、「けり」が濁音化した連語。軍記で主に用いられた。

12物の具　一般に道具・調度品の類をいうが、軍記では鎧、甲などの武具を指す。

12手塚太郎　手塚太郎光盛（巻七「実盛最期」）。手塚氏は、信濃の国諏訪神社下社の祝部、金刺氏の一族。「手塚の別当」の子とも、甥とも言う。

との別れに際しても、女々しく泣くでもなく「最後のいくさして見せ奉らん。」（5行目）と、怪力で名高い恩田八郎師重の首をねじ切って見せるというところから、女性でありながら武士としてたくましい力強さを持った人物として描かれていると分かる。

問 **木曽殿と巴は、最後にどのような思いを伝え合っているか。**

答 木曽殿は無事に逃げおおせてほしいと思い、巴は自分がともに戦ってきたことを忘れないよう最後に華々しい戦いをしてみせようと思った。

問 **第二段落以降の場面で登場する人物は、どのような関係にあるか。**

答 〈木曽方〉木曽殿（義仲）・今井四郎兼平（義仲の乳母子）↑敵対↓〈鎌倉方〉敵五十騎・石田次郎為久と郎等。

補 本文全体の人物関係を把握させ、状況を理解させる。

● 八九ページ

問 **今井四郎が義仲に「松原へ入らせ給へ。」（9行目）と言ったのは何のためか。**

答 義仲に自害させるため。

補 義仲を逃げさせようとしているのではないことに注意させる。

問 **「日ごろは何ともおぼえぬ鎧が、今日は重**

13 手塚別当　手塚太郎の叔父。

14 今井四郎　今井四郎兼平。信濃権守中原兼遠の第四子で、兄の樋口次郎兼光とともに、義仲の乳母子として、いわゆる木曽四天王の一人として多くの戦闘で活躍した。寿永三（一一八四）年のこのとき、本文では三十三歳とあるが、三十二、三十四歳とする異本もある。義仲と今井との関係は「木曽殿の御乳母子、今井四郎兼平」とある。

● 八九ページ

1 日ごろは…重うなつたるぞや　武勇の誉れの高い武将という栄光に包まれていた義仲が、戦場において敗残の我が身を見いだしたときに、すっかり心の張りを失って傷つき弱ってしまった状態になっている。鎧という武士の象徴が重く感じられるということは、武人としての自分を失いかけていると言える。武将にあるまじき気弱な言葉を口にするところに、乳兄弟の兼平を求めて、京から敵の大手の大軍がいる瀬田に向かった義仲が、すでに人間の情愛の世界に身を置く私人に返ってしまっていることが感じられる。

3 御身もいまだ疲れさせ給はず　兼平は、この言葉の最後にあるように、もはや義仲に残された道は武将として名誉の自害をするしかないと知って、弱気な言を吐いている義仲を励まして、武将としての身の処し方を全うさせようとしている。それは、義仲のための盾となって戦うことに武人としての最期を賭けている兼平にとっても、自らを励ます言葉であったろう。「御身」の「身」は、人や動物の身体のこと。

3 一領　「領」は「衣服の襟」の意から転じて、衣装や鎧を数える数詞。

4 着背長　大将軍用の大鎧の別称。騎馬で用いるために草摺が長く、背中から着けて右脇で合わせるところから、この名がある。

4 臆病でこそ　気後れして。

6 防ぎ矢　味方が別の行動を取るのを援護するために敵に矢を射ること。

6 粟津の松原　義仲は、宇治橋の守りを突破した義経軍が京になだれ込んで来たのに対して、なすすべなく逃れて、大津の打出の浜で、瀬田から退却してきた兼平と出会ったことになっている。粟津は打出の浜からは東の方で、瀬田に戻ることになるので、瀬田を攻めた関東軍の大手、範頼軍が京へ向かう背後に出ようとしたという位置関係である。

うなつたるぞや。」（1行目）とあるが、義仲がこのように言った理由を説明せよ。

答　一番信頼する今井四郎と二人だけになったので、緊張が解けて弱気になったから。

問　「御身もいまだ疲れさせ給はず。御馬も弱り候はず。」（3行目）とあるが、兼平がこのように言ったのは、どのような気持ちからか。

答　疲れ果てた義仲を励まそうとする気持ち。同時に、そのことによって折れそうな、自分の心を支えようとする気持ちがある。

問　「兼平一人候ふとも、余の武者千騎とおぼしめせ。」（5行目）と兼平が言ったのは、何のためか。

答　義仲が味方の無勢もあって気弱になったと思い、義仲を力づけるため。

問　◉「いかにもなる」（11行目）とは、具体的にはどのようになることか。

答　死ぬこと。

補　「どうなってもいい」は現代でも「死んでもいい」の意味に用いることがある。

問　義仲が都を逃れてこの地まで来たのは、何のためか。

答　今井四郎と同じ場所で死ぬため。

補　義仲の言葉の内容を読み取らせる。彼はあくまで兼平と共に戦って死にたいのである。

問　(1)義仲が、兼平と死のうと思ったのはなぜ

8打つて行くほどに　（馬に）鞭を打って走らせて進むうちに。

8新手の武者五十騎　この言い方から、孤軍をもって奮闘し、今や心身ともに萎え落ちようとしている義仲主従に対して、関東方は、次々に新手の全く疲れていない将兵をつぎ込めるわけで、この戦いのどうしようもない彼我の差を印象づけている。戦い疲れた義仲主従に対して、「新手の」と言ったところに、心理的に重い意味合いがあろう。

11いかにもなる　「どのようにでもなる」の意で、命のある限り戦ってその場で死ぬこと。

11なんぢと一所で死なん　物語は、関東軍に敗れた義仲が、長坂（京都の北山、鷹峰から杉坂へ向かう道）を越えて丹波方面へ行くか、竜花越え（大原の北、途中峠）をして北陸へ向かうかと想像されていたのに、「今井が行方」が知りたくて、瀬田に落ちて行ったとしている。長坂越えや竜花越えは、武将として再起を企図する道であったわけだが、瀬田はいわば死地であって、このときの義仲は、骨肉の思いに生きる一個の自然児として行動していると言える。義仲の心にあったのは、「幼少竹馬の昔より、死なば一所で死なんとこそ契りしに、ところ〴〵で討たれん事こそかなしけれ。今井がゆくゑを聞かばや。」（「河原合戦」）という気持ちだけであった。

12ところどころ　「別々の場所」。これに対して、「一所」「ひとところ」は、共に「同じ場所」の意。

14馬の鼻を並べて駆けんとし給へば　兼平といっしょに敵勢に向かって斬り込もうとしたことを言う。「鼻」は「鼻先」の意で、ここは、兼平の馬と向きを同じにしたこと。

14馬の口　馬のくつわを取り付けた部分。

● 九〇ページ

1弓矢取り　「弓矢を取る者」の意で、武士を指すのは、当時、武士の技量は太刀の技よりも弓矢や乗馬の腕前が重んじられたことによる。

1いかなる高名候へども　「どんな手柄を立てておりましても」。「ども」は条件と結果の一般的恒常的な逆接関係を示している。「…ても必ず～」という仮定に近い用法である。

2長きき ず　いつまでも残る不名誉。ここでは、死ぬ時に油断して失敗すると後々まで

か。(2)また、**義仲の兼平に対するどのような気持ちがうかがわれるか。**

答 (1)兼平は義仲の一の家来で、強い主従の絆で結ばれている。二人は乳兄弟としての情愛によっても結ばれており、互いに、死なば一所で、と誓い合った仲であるから。(2)実の兄弟と思うほどの深い愛情。

●九〇ページ

問 **「最後のとき不覚しつれば、長ききずにて候ふなり。」（1行目）とは、具体的にどのようなことを言うのか。**

答 敵の名もない郎等に首を取られると、名高い武将でも不名誉な死に方になって、後々まで非難されること。

補 「不覚」「長ききず」の意味を確認し、状況に当てはめて考える。

問 ◉**「御身は疲れさせ給ひて候ふ。」（2行目）と、今井四郎兼平が前とは逆のことを言ったのはなぜか。**

答 共に戦おうとした義仲を自害に導こうとしているから。

補 前は、弱気になった義仲に自害する気力を取り戻させるため励ましたが、ここでは義仲が敵と戦おうとしたので、その余力がないことをはっきりと示して、改めて自害に導こうとしている。

問 **「口惜しう候へ。」（5行目）という兼平の**

恥辱となることを案じている。

3押し隔てられ　敵に押しやられて二人が離れ離れになること。

3言ふかひなき人の郎等　「人の郎等」で「誰かの家来」の意。「郎等」は、主人と血縁関係のない家来で、血縁関係のある家来の「家の子」とは区別する。「言ふかひなき」は「郎等」に続く。ここからも、不釣り合いな敵に討たれることが不名誉であることが分かる。

4それがし　誰それ。①名前の不明な人を漠然と指す、②故意に名前を伏せる、③名前を示す必要が特にない、などの場合がある。ここは、③。

5なんど　副助詞「など」と同じ働き。代名詞「なに」＋格助詞「と」の「なにと」の音が変化したもの。

12乳母子　ここは、義仲を養育した中原兼遠の子を意味するが、それもやはり「乳母子（＝乳兄弟）」の関係で、武家社会では、主従関係の中で、肉親に準ずる絆で結ばれた、強い結び付きを意味する。

13まかりなる　「まかり」は、謙譲の動詞「まかる」の連用形が他の動詞の上に付いて、謙譲の気持ちを添える用法。「まかりありく」「まかり老ゆ」など。今井の名乗りは義仲と似ているが、直後で「さる者…見参に入れよ。」と自分が「好き敵」であることを強調し、敵の気を自分に引こうとしていることが感じられる。また義仲と違い、頼朝に対して敬語を用いている。

13鎌倉殿　源頼朝。

14見参に入れよ　兼平は敵に向かって、自分を討って頼朝の御覧に入れよ、と言っている。義仲が「義仲討つて兵衛佐に見せよや」（八七ページ）と言ったことと呼応している。

15八筋　「筋」は細長いものを数える数詞。「もと光る竹なむ一筋ありける。」（「竹取物語」）

15さしつめ引きつめさんざんに…あれに馳せ合ひ、これに馳せ合ひ、切つて回る　これら、同語・同音の繰り返しは兼平がただ一人で目まぐるしく立ち働くさまを印象づける表現である。下文には、「追つかかつてよつぴいてひやうふつと射る。」の促音で畳み掛けて、力動感を高める表現があり、語り物の戦闘描写の特徴がこの段でもよく表れていると言えよう。「さしつめ」の「さす」は弓に矢をつがえること。「引きつ

言葉にはどのような気持ちが込められているか。

答 武士たるものが最期のときに不覚をとってはならぬという義仲への愛情。

問 **「今井四郎、木曽殿、主従二騎になつて…：粟津の松原へぞ駆け給ふ。」（八八・14～九〇・9）の段で、**
[中](1)**兼平の願いとは何か。**
[難](2)**また、兼平がそのように願ったのはなぜか。**

答 (1)主人義仲が松原の中で立派に自害すること。(2)戦う余力もなく、主従二騎となっては、自害によってしか義仲の名誉を守れないから。

問 **義仲が松原へ駆けて行った後、兼平がたった一人で勝ち目のない戦いをしたのはなぜか。**

答 義仲に自害させるための時間を稼ぐため。

問 [難](1)**兼平が名乗りをあげるいちばん初めに、自分は「木曽殿の御乳母子」（12行目）だと言っている。そこには兼平のどのような気持ちがこもっているか。**
[中](2)**この言葉から分かる義仲と兼平の関係を説明せよ。**

答 (1)自分は義仲の第一の家来であり乳兄弟なのだという誇りと、義仲への敬愛。また、自分が相手にとってよき敵だとアピールし、

め」の「引く」は弓を引くこと。「つめ」は連続した動作を示す接尾語。「さんざんに」は容赦のない激しさを表す擬態語。

15死生は知らず 「死んだか生きているかは分からないが」。一説に、「自分の命を顧みることなく」。

●九一ページ

1やにはに 名詞「矢庭（弓矢による戦いの場）」から生じた、「その場ですぐに」「たちどころに」の意の副詞。

1打ち物 「打ち鍛えて作った物」の意で、刀や長刀（なぎなた）の類の総称。

4分捕り 敵の武具を奪うことにも、敵の首を討ち取ることにも用いる。本文注は、前者に従う通説を取ったが、一説に、敵の首を取ることとする（岩波古語ほか）。「生捕（いけどり）分捕思ひ思ひにぞしける。」（「義経記」）

7裏かかず （鎧の札が丈夫なので、矢が）鎧の裏まで貫通しない。

8あき間 鎧の札の間などにあるすき間。

8手も負はず 「手を負ふ」は負傷すること。兼平は敵の矢を受けても負傷しなかった。

10正月二十一日 「玉葉」「愚管抄」「吾妻鏡」などは、正月二十日のこととする。

10入相ばかりのことなるに、薄氷は張つたり けり 「入相」は日没、たそがれ時。「ことなるに」の「に」は接続助詞で「…のうえに」と添加する意を表す。日没頃の薄暗さに加えて、薄氷の張っていたことが、深田があることに気づかない（「深田ありとも知らず」）根拠となっている。

11張つたりけり 「張っていることではあり」。「けり」は、終止形の中止法的用法で、強い語気で畳み掛ける感じを出すもの。

11深田 泥の深い田のこと。冬や春先も水の引かない湿田を言う。泥田。

13あふれども 「あふる（アオル）」は、鎧で障泥（あふり）（鞍の下から馬の両脇腹に垂らした泥よけ）を蹴ること。

14打てども 「打つ」は、鞭で馬の背をたたくこと。

15おぼつかなさ 「おぼつかなし」は、「ぼんやりしていて様子がよく分からない」の意から、「不安だ、気がかりだ」。

●九二ページ

1内甲 甲の内側。額の部分。

1三浦の石田次郎為久 頼朝方の武将。石田の住人である三浦氏の次郎為久。「石田」は相模国の地名。現在の神奈川県伊勢原市。

1追つかかつて 「追つかかり」は「追ひか

敵の注意を自分に向けようとする気持ち。
(2)主従であり、かつ兄弟同然の関係。単なる主従以上の深い情愛で結ばれている。

問　今井四郎の戦いぶりはどのように描かれているか。

答　一人で五十人の敵を相手に奮戦する。矢を射れば百発百中、矢がなくなると刀で戦い、敵の武器を奪う。あまりに強いのでまともに向かってくる敵はいない。敵は今井を射殺そうとするが、矢の腕が劣り、今井の鎧が上等なのでけがもさせられない。

補　「兼平一人候ふとも、余の武者千騎とおぼしめせ。」（八九・5）との言葉通りの戦いぶりだが、これは義仲の自害の時間を稼ぐために奮戦していることに留意する。兼平の戦いぶりをテンポよく描くことで、悲劇の場面に変化を与えていることにも着目させる。

●九一ページ

問　義仲が深田にはまってしまったのはなぜか。

答　冬で、田に薄氷が張っていたから。夕暮れで薄暗く、よく見えなかったから。

補　正月二十一日・入相が単に時間を示したものではなく、義仲が討ち取られる原因を作ったことに注意させる。

●九二ページ

問　「振り仰ぎ給へる」（1行目）について、(1)誰が、なぜ振り仰いだのか。(2)その結果どうなったか。

答　(1)義仲が、兼平の行方を気に掛けたから。(2)内甲を矢で射られてしまい致命傷を負った。

問　義仲が討ち取られた経緯を順を追って書け。

答　(1)深田にはまって抜け出せなくなった。(2)今井はどうしたかと振り返った。(3)石田次郎に内甲を射抜かれた。(4)致命傷だったので馬の背にうつ伏せになった。(5)石田が刀で義仲の首を取った。

補　深田にはまって抜け出せなくなったこと、今井はどうしたかと心配して振り返ったことが、討たれた原因であることを把握できればよい。

問　●「聞こえさせ給ひつる」（6行目）の「聞こえ」は、どのような意味か。

答　世に広く知られている、の意味。

補　「聞こえ」は下二段動詞「聞こゆ」の未然形で、「自然に耳に入る」の意。ここは、広く評判になっていること。

問　「今は誰をかばはんとてか…」（9行目）とあるが、誰をかばっていたのか。

答　義仲。

補　今までかばっていたものがなくなったということから考える。

問　「さてこそ粟津のいくさはなかりけれ。」かり」の促音便形。「かかる」は「動作が途中まで進む、相手に及ぶ」という意を添える補助動詞。

2 よつぴいて　「よくひきて」の音便形。

2 ひやうふつと　矢を放ったときの慣用的な擬音語。「ひやう」は矢が風を切って飛ぶ音、「ふつ」は矢が物に当たった音。

2 痛手なれば、真っ向を…　「痛手」は重傷、「真向」は甲の鉢の前面のこと。義仲は為久に射られて重傷を負い、甲の前面を馬の頭に押し当ててうつ伏せになった。

3 石田が郎等二人落ち合うて　石田為久が義仲を弓で射て、さらに討ち果たそうとしているところに、石田の郎等が追い付いて加勢をしたのである。つまり、下文の「首をば取つてんげり。」の主語は、石田為久と見られる。孤立無援の義仲に対して、郎等二人を加勢に得た石田の優勢を物語っている。「落ち合うて」は、「その場で出会って。合流して」。戦場の描写では「その場に来て加勢する」の意になる。今井が心配していた「言ふかひなき人の郎等に…なんど申さんこと」（九〇・3）の通りになってしまったことに気づかせたい。

4 取つてんげり　「取りてけり」の音便形

（13行目）という結末にはどういうことが示されているか。

答 強力な東国軍に対するほんの一握りの抗戦でしかなく、両軍入り乱れて華々しく戦う合戦と呼べるほどのものではなかったことを示している。

問 **「木曽の最期」において、作者が描きたかったのはどのようなことと考えられるか、簡潔に答えなさい。**

答 義仲・巴・兼平主従の互いを思いやる美しい情愛。

問 **臨場感のある描写になっているのは、どのような書き方によっているか。**

答 具体的な数字を多用していることと、擬態語が効果的に用いられていること。

「取ってけり」に「ん」が加わった形。

10剛の者　強くて勇敢な者。優れた勇士。

13貫かつて　「貫かりて」の音便形。「貫かる」（四段動詞）は「貫く」に対する自動詞の形。兼平は自ら太刀に貫かれて死んだ。

13さてこそ粟津のいくさはなかりけれ　日本古典文学大系の頭注の、「それで結局、粟津の合戦と名づけるようなはなばなしいものはなかったのである。」とする解に従った。義仲が自害のために入っていった場所が「粟津」の松原なので、ここでは二人しかおらず、義仲も討たれ、今井も自害したので、戦というものにはならなかった、という解釈である。諸本では、「…いくさはかてにける。」「…やみける。」などとあるところから、「合戦は終わった」とする解も多い。「さて」は義仲・兼平主従の討ち死にを指すが、「いくさはなかりけれ。」の解釈には、この二類があるので、これらを紹介しながら、「さて」についても考える必要がある。

鑑賞

僅か二歳で父を殺され、「是いかにもしてそだてて人になしてみせ給へ。」（巻六「廻文」）という母の必死の頼みを受けた木曽の中原兼遠の助けによってようやく人となることを得た義仲であるが、以仁王による平家追討の令旨によって、治承四（一一八〇）年九月に挙兵するやたちまちに力を得て、寿永二（一一八三）年五月には倶梨迦羅峠、篠原の戦いで平家に大勝し、七月末には京を平家に替わって支配する。正に風雲児と呼ぶにふさわしく義仲は運命の階段を駆け上ったのであったが、滅亡への道も早く、入京してから半年の後には敗死の日を迎える。山田孝雄氏は「平家物語」を三部に分け、一部の清盛、三部の義経に対して、義仲を第二部の主人公に擬する（「平家物語考」）が、更に小松茂人氏は義仲物語には三部の展開があるとする（「義仲・義経」「国文学」所収、昭和三三・九）。すなわち上洛までの義仲は「まことに知仁勇兼備の名将として『朝日将軍』の名にふさわしく描かれる」のに比して、上洛後には一転して、「無知・無風流の田舎者として、清盛につぐ悪行者」とされるが、最期を迎える第三部では人間愛に富み、「浪漫的英雄として美化され」、「典型化された理想的英雄像とは異なり、内面的に認められている」と言う。義仲像には

「平家物語」内部において敬語法に差があるなどの矛盾があることは五十嵐力氏（「軍記物語研究」）以来指摘され、水原一氏（「平家物語の形成」）はこれを形成基盤の異なる説話が合成されたために生じたものとするが、私たちがこの「木曽の最期」を読むに当たっては、そうした義仲像の変遷もさることながら、主人公がわずか半年前に五万余の兵を率いて入京したばかりの英雄であることに留意すれば足りるであろう。

範頼と義経とに率いられた鎌倉方の軍勢六万余騎が、勢田川・宇治川の線まで押し寄せたとき、義仲の手勢は二千に足らぬものであった。平家を追って入京したときの五万騎に比べると、信じられないほどの寡勢である。兼平の兄樋口次郎兼光の勢は十郎行家を追って紀伊国にあったとしても、都の貴族政界の支持を失い、備中国で、屋島から中国地方に進出した平家と戦った水島合戦に敗れた義仲を見限って、多くの軍団が離脱していったことによるわけで、都を武力で維持することの困難を克服する政治力を、義仲は持たなかったのである。このような成り行きの背景には、この時期の慢性的な不作のために都は深刻な食料不足の状況にあったことがあり、統制の取れていない五万の軍勢が、自分たちも思いがけないスピードで上京を果たした悲劇だったわけだが、物語は、そうしたいっさいの事情には触れずに、ただ「折ふし、勢もなかりけり。」（巻九、生ずきの沙汰）と言って、「木曽の最期」を、純粋に一個の武人の末路の悲哀として語っている。

義仲が六条河原で死線を脱したとき、義経軍の敏速な行動力の前に、義仲が武将として再起を図る手立て、例えば、後白河法皇を擁して都落ちするというような可能性は断たれてしまった。それでもなお、人々は、義仲が長坂越えか、竜花越えによって、北国へ向かう再起の道を行くだろうと想像した。ところが、義仲は、「今井が行方を聞かばや」という思いに駆られて、瀬田へ向かう。瀬田は、今井勢八百余騎を、鎌倉方の大手、範頼の指揮する三万五千騎が攻めている、義仲にとっては死地でしかない。あえて死地に赴く義仲は、既に武将としてのありようから抜け落ちて、木曽の山中で少年の日を共に過ごした兼平と最期の時を共有することだけを期する、一個の人間に戻ってしまっているのである。

ひたすら死を期して戦う主従の叙述は、「木曽三百余騎」が敵「六千余騎」の中を縦横に疾駆する様に始まり、数詞を重ね、ついに「主従五騎にぞなりにける。」まで、単純な事実をもって臨場感を盛り上げた、巧みなものである。その「五騎」になるまで従った女武者の巴に対し、義仲は武士の名誉を保つためという言葉で離脱させているが、これは巴を逃がすための口実であろう。巴がどんなに優れた武人であっても、義仲にとっては命を守るべき一人の女性であったと言える。その一方で、物語的には、木曽殿の最後の戦の細部にわたる具体的な事実の真実らしさは、この巴の存在により間接的に保証されていることになるのである。

木曽殿は、戦の終わりに、兼平と二人になって「日ごろは何ともおぼえぬ鎧が今日は重うなつたるぞや。」と言う。我が事の既に終わったことを自覚する者の一種の満足を表す言葉である。兼平はこれを臆病のゆえと言い、なお励まして自害を勧めるが、それは彼の主の名誉を思う真情に出たことで、真実義仲を臆病と思ったわけではない。義仲は兼平と一所に死ぬことが最後の望みであるのに対し、今井には主を敵に討たしてはならないという情が

あった。しかし、そのような今井の判断は、あくまで兼平を一所で死ぬべき友人としてのみ求め続ける義仲の人間的な情愛に裏切られ、義仲は敵に名をなさしめ、口惜しい最期を遂げる。「平家物語」の世界では、主従・親子等の誓い合った者は一所に死ぬというのが武士の一つの道徳になっており、義仲にとっては乳母子の兼平に対する骨肉の情愛がそれを求めさせたのである。愛情によって生き延びさせた巴と、愛情によって共に死を願った今井、対照的ではあるが、どちらに対しても義仲が人としての情愛を求めたことに違いはない。武将としての名誉の自害をという兼平の願いに反して、無残な敗死を遂げてしまったところに、義仲の、木曽の山中で人となった自然児らしい人間味が現れ出ていて、最期に武人になりきれなかった哀れを見事に印象づける場面となっている。「祇園精舎」で述べられた盛者必衰のことわりの具体的な例としてもさることながら、平家物語の文学性とも言える、愛による生と死が矛盾なく語られる多様性もきちんと読み取らせたい。

《板書例》

義仲と巴が別れるとき

義仲　「おのれは、疾う疾う、女なれば…」

　→巴への愛情

巴　なほ落ちも行かざりけるが、あまりに言はれ奉つて、

「あつぱれ、よからう敵がな。…」

　→義仲への愛情

愛による生がテーマ

《板書例》

主従二騎になったとき

義仲　「日ごろは何ともおぼえぬ鎧が…」
「…一所でこそ討ち死にをもせめ。」

兼平　「…臆病でこそさはおぼしめし候へ。」
馬より飛び降り、主の馬の口に取りついて…

《板書例》

義仲と兼平が最期を遂げたとき

義仲　あふれどもあふれども…今井が行方のおぼつかなさに

兼平　「今はたれをかばはんとてか、いくさをもすべき。」

義仲→乳母子兼平への信頼

兼平→主の名誉を思う忠誠

愛による死がテーマ

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **音便や文の調子に注意して、音読してみよう。**

【答】（略）

▼ポイント▲　特に促音便の「つ」の表記が大きいままなので注意する。（※「学習活動のポイント」参照）

言葉と表現の解答例

1 **次の各部分から敬語を指摘し、敬語の種類と品詞について調べてみよう。**

(1) **のたまひけれども（八八・3）**
(2) **申しけるは（八九・2）**
(3) **おぼしめし候べき（八九・4）**
(4) **討たれさせ給ひなば（九〇・3〜4）**

【答】(1)のたまひ　尊敬語、動詞（ハ行四段活用）
(2)申す　謙譲語、動詞（サ行四段活用）
(3)おぼしめし　尊敬語、動詞（サ行四段活用）　候　丁寧語、動詞（ハ行四段活用）
(4)させ　尊敬語、助動詞　給ひ　尊敬語、動詞（ハ行四段活用）

▼ポイント▲　尊敬語、謙譲語、丁寧語の区別をさせて、敬語の種類が主語を考える手掛かりとなることを学習させる。

言語活動の解答例

1 **次のそれぞれの場面での、登場人物の心情はどのようなものか、考えてみよう。**

(1) **義仲と巴が別れるときの、義仲と巴のそれぞれの心情。**
(2) **主従二騎になったときの、義仲と兼平のそれぞれの心情。**
(3) **義仲と兼平の、それぞれの最期を遂げたときの心情。**

【答】
(1)義仲→武士の名誉を持ち出して、巴を逃がそうと思う。
　巴→離れがたい思いだが、強く説得されて別れを決意し、義仲に最後の戦を見せようと思う。
(2)義仲→兼平と一緒に戦って死にたい。
　兼平→主君には英雄らしく立派に自害してほしい。
(3)義仲→兼平の勧めどおり、武士の名誉を守って立派に自害しよう。
　兼平→どんなことをしてでも敵を防いで、主君に立派な最期を遂げさせたい。
　義仲→奮戦の甲斐なく主君が敵に討たれ、もう戦う意味がなく

なった。主君に代わって立派な最期を敵に見せてやろう。

▼ポイント▲

(1)義仲が、なぜ武士の名誉を持ち出したのか、その奥にある義仲の心情や、巴が別れ際に敵を倒して見せるところからは、女心より最後まで木曽殿の忠実な家臣でありたいという思いが感じられることを深く読み取らせたい。

(2)(3)義仲は乳母子である兼平と死を共にしたいと願うが、兼平は義仲に武士としての名誉ある最期を遂げてほしいと願っている。お互いを深く思う心情、相手の心情を汲み取って行動を決めていく過程と結末を、順を追って丁寧に読み取らせたい。

（小林　俊洋）

参考　祇園精舎

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については巻末参照。）

①祇園精舎（ぎをんしやうじや）の　鐘（かね）の　声（こゑ）、諸行無常（しよぎやうむじやう）の　響（ひびき）　あり。②娑羅（しやら）双樹（さうじゆ）の　花（はな）の　色（いろ）、盛者必衰（じやうしやひつすい）の　ことわり　を　あらはす。③おごれ　る　人（ひと）も　久（ひさ）しからず、ただ　春（はる）の　夜（よ）の　夢（ゆめ）の　ごとし。④猛（たけ）き　者（もの）も　つひに　は　滅（ほろ）び　ぬ、ひとへに　風（かぜ）の　前（まへ）の　塵（ちり）に　同（おな）じ。⑤遠（とほ）く　異朝（いてう）　を　とぶらへ　ば、秦（しん）の　趙高（てうかう）、漢（かん）の　王莽（わうまう）、梁（りやう）の　朱异（しゆい）、唐（たう）の　禄山（ろくさん）、これら　は　みな　旧主（きうしゆ）先皇（せんくわう）の　政（まつりごと）に　も　従（したが）は　ず、楽（たの）しみ　を　極（きは）め、いさめ　を　も　思（おも）ひいれ　ず、天下（てんか）の　乱（みだ）れ　ん　こと　を　悟（さと）ら　ず　して、民間（みんかん）の　憂（うれ）ふる　ところ　を　知（し）ら　ざつ　しか　ば、久（ひさ）しから　ず　して、

①祇園精舎（の無常堂）の鐘の音は、諸行無常の（真理を示す）響きがある。②娑羅双樹の花の色は、盛者必衰の道理を表している。③おごりたかぶっている人も（そのおごりが）長くは続かない、まるで（はかない）春の夜の夢のようだ。④勢いの盛んな者も最後には滅んでしまう、ただただ風の前の塵と同じ（ように、はかないもの）なのだ。⑤遠く外国（の例）を調べてみると、秦の趙高、漢の王莽、梁の朱异、唐の禄山、これらは皆もとの主君や前の皇帝の政治にも従わず、歓楽を尽くし、（臣下の）諫め（の言葉）をも考えにいれず、天下が乱れることになるを悟らないで、世の人々が悲しみ嘆くことを知らなかったので、（その栄華が）長続きしないで、滅んでしまった者たちである。⑥身近く本朝（の例）を調べてみると、承平の将門、天慶の純友、康和の義親、平治の信頼、これらはおごりたかぶっている心も勢い盛

亡じ　に　し　者ども　なり。⑥近く　本朝　を　うかがふ　に、　承平
サ変・用｜完・用｜過・体｜断・終｜形ク・用｜格助・対象｜八四・体｜接助・単接

の　将門、天慶　の　純友、康和　の　義親、平治　の　信頼、
格助・体修｜格助・体修｜格助・体修｜格助・体修

これら　は　おごれ　る　心　も　猛き　こと　も、皆　とりどりに
代｜係助・区別｜ラ四・已｜存・体｜係助・列挙｜形ク・体｜係助・列挙｜副｜形動ナリ・用

こそ　あり　しか　ども、間近く　は　六波羅の入道前太政大
係助・強意(係)｜補動・ラ変・用｜過・已(流れ)｜接助・逆確｜形ク・用｜係助・区別

臣　平朝臣清盛公　と　申し　し　人　の　ありさま、
格助・引用｜サ四・用(謙)語り手→清盛｜過・体｜格助・体修

伝へ承る　こそ、心　も　言葉　も　及ば　れ　ね。
ラ四・体(謙)語り手→清盛｜係助・強意(係)｜係助・列挙｜係助・列挙｜バ四・未｜可・未｜打・已(結)

んなことも、皆それぞれ（に甚だしいもの）であったけれども、近頃では六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公と申し上げた人のありさまは、伝え聞くにつけても、想像も（言い表す）言葉も及ぶことができない（ほどのすさまじさな）のである。

指導上の注意点と発問例

● 九四ページ

問 **「諸行無常」（2行目）とは、どのようなことか。**

答 あらゆるものは生滅し、永遠に変わらないものはないというこの世のありさま。

補 「盛者必衰」「おごれる人も久しからず」「猛き者もつひには滅びぬ」なども同じ意味を表している。

問 **冒頭の二文「祇園精舎の鐘の声、…。娑羅双樹の花の色、…。」（2行目）はどのような音律上の特徴があるか。**

答 七五調の調子よいリズムとなっている。

問 **「祇園精舎の鐘の声、…ひとへに風の前の塵に同じ。」（2行目）について、**
[中]この部分から、対句表現を指摘せよ。
[難]対句表現の効果を二点あげよ。

答 2　1
[1]「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。」と「娑羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらはす。」「おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。」と「猛き者もつひには滅びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。」[2]文章の調子を整え、リズム感を出す。繰り返しにより思想を強調する。

問 **「盛者必衰のことわり」（2行目）を分かから成り立っている。A・A′によって、仏教的無常のことわりを繰り返して強調し、B・B′によって、その真理の顕現である歴史的事実の一般化を繰り返して指摘している。そしてさらに異国の歴史、本国の歴史、とクローズアップしていき、最も近い清盛一門に焦点をあてていく。文が進むごとに、仏教的思想が徐々に歴史的に具体化していくような構造になっている。**

語句の研究

● 九四ページ

2 祇園精舎　「祇園」は祇樹給孤独園（ぎじゅぎっこどくおん）の略。西暦前五世紀の頃、中インドの舎衛国（しゃえ）波斯匿王（はしのく）の太子祇陀（ぎだ）が所有していた園であったが、釈迦に深く帰依した長者須達多（すだった）が買い、園内に堂宇を造り、釈迦に献じた。「精舎」は精練行者のいる所、すなわち、僧院のこと。釈迦は、前後二十五年ここに住んで、中インド地方に法を説いた。現在のウッタル・プラデーシュ州にある、サヘート・マヘート遺跡がこれであると言う。「祇園精舎の…塵に同じ。」の文章は、調子のよいリズムが感じられるが、これは七五調を基調とする音数律によってリズム感が生まれているからである。冒頭は、七・五を四回繰り返す今様の形式そのもので、それを「…あらはす。」と受けて、「おごれる…ごとし。」が、七・六・七・六と、ややゆったりした口調で散文に近づけている。対句は、A「祇園精舎の…響きあり。」とA′「娑羅双樹の…あらはす。」、B「おごれる…のごとし。」とB′「猛き…に同じ。」というように、この段全体が二組の対句表現

2 鐘の声　祇園精舎の無常堂にあったという鐘の音。病んだ僧をこの無常堂に入れて死を迎えさせると、堂の四隅にある鐘が鳴って、「諸行無常」の偈（げ）（経文のうちに含まれている短句）を説くと言われ、病僧はこれを聞いて、苦悩が消え、清涼の楽を得て浄土に往生したと言う。「祇園図経」に詳しい。

2 諸行無常　「諸行」は、因縁によって生じ、過去・現在・未来を環流する全ての現象。万物。「諸行無常」は、有名な偈「諸行無常（ニシテレ）、是生滅法（ノナリ）、生滅滅已（シをハリテ）、寂滅為楽（ナルヲスト）」（「涅槃経（ねはんぎょう）」聖行品（しょうぎょうぼん））の第一句。平家の作者は、無常堂の鐘の音を「寂滅為楽」の悟りの声とせず、「諸行無常」の無常の声と受け取っており、これをテーマとするという

問 **答** **りやすく現代語訳せよ。**
勢い盛んな者も必ず衰えるという道理。

問 **答** **「おごれる人」（3行目）とは、どのような人か。**
時勢に任せて勝手なことをする人。

補 **答** 「おごる」は「権勢を誇る」の意。

問 **補** **答** **「春の夜の夢」（3行目）とあるが、どのようなことのたとえか。**
短く、はかないこと。

補 **答** 「風の前の塵」も同じ。すぐ吹き飛ばされてなくなってしまう。

問 **答** **右と同じ意味の比喩表現を抜き出せ。**
風の前の塵

問 **答** **「遠く異朝をとぶらへば」（4行目）について、**
① この部分に対応している部分はどこか。
② 「とぶらふ」とは、どのような意味か。

答 ② [1]近く本朝をうかがふに　[2]問い聞く、調べる。

問 **「知らざつしかば」（7行目）を文法的に説明せよ。**

答 「知らざりしかば」の促音便形。「知ら」はラ行四段動詞の未然形。「ざり」は打消の助動詞「ず」の連用形で、促音化している。「しか」は過去の助動詞「き」の已然形。「ば」は順接の確定条件（原因・理由）を表す接続助詞。

作者の姿勢が読み取れる。

2 娑羅双樹　「娑羅」はインドに産する高木。淡黄色の小花を開く。釈迦入滅のとき、その床の四方に一双ずつ八株あったのを「娑羅双樹」と言う。「涅槃経」によると、釈迦の死に感応して、東西の二双が合して一樹となり、南北の二双もまた一樹となって、釈迦を覆い、花はことごとく白色に変じたと言う。これについては、「淡黄色の花が白色に変わった」と「木が白くなって枯れた」の二通りの解釈があるが、「平家物語」では花としている。

2 盛者必衰のことわり　「仁王経」護国品にある句。「盛者必衰、実者必虚」とある。「祇園精舎の鐘」と「娑羅双樹の花」の仏教故事は、源信の「往生要集」によって我が国に伝えられ、唱導などを通じて普及し常套化していったものであろうが、「諸行無常」同様、「娑羅双樹の花」も、元来は「生者必滅」とあるべきところを人間の娑婆世界の栄枯盛衰に焦点を置く歴史語りの序章としての配慮から、このような表現になったのであろう。

3 久しからず　「ず」の活用形は「久しからず」と「滅びぬ」とが対句として対応しているところから終止形と判断する。ここは、終止形の中止法的用法で、終止形で言い切れない感じが「…ということで、それは…（のごとし。）」と下文に続いている。

3 春の夜の夢　「風の前の塵」と共に、はかないものの例え。「往生講式」に「朝開ニ栄華一、暮随ニ無常之風一、宵翫ニ朗月一、曙隠ニ別離之雲一、一生是風前之燭、万事皆春夜夢」とある。

3 猛き者　「猛し」は「勢いが盛んだ、勇ましく強い、勇猛である」などの意。

5 秦の趙高　秦の始皇帝の死後、丞相李斯を殺し、二世皇帝を擁立して横暴を極めたが、三世皇帝子嬰のとき誅せられた。「史記」秦始皇本紀に見える。「秦」は中国春秋戦国時代の大国。前三一年〜前二六年。戦国の列国を滅ぼして天下を統一したが、三代十六年で漢の高祖に滅ぼされた。

5 漢の王莽　前漢孝元皇后の甥。平帝の后の父。孺子嬰を立てて国政をほしいままにし、後、嬰を廃して、自ら帝を称し国号を「新」と改めたが、十八年で諸侯に殺された。「漢書」九十九に見える。「漢」は、ここでは前漢を指す。前漢は、秦の滅亡後、項羽を倒して漢王劉邦が建てた国。十四代

問　**「心も言葉も及ばれね。」（11行目）とあるが、「心」はここではどのような意味か。**

答　想像

補　全体の意味は「想像することも言葉で説明することもできない」となる。「れ」は可能の助動詞「る」の未然形。「ね」は打消の助動詞「ず」の已然形で、上の「こそ」の結びとなっている。

問　**右は、誰の、どのような様子か。**

答　平清盛の、おごり高ぶった様子。

問　**異朝の人や本朝の人を例示した後、平清盛を出したのはなぜか。**

答　あらゆる歴史的人物たちより、平清盛のほうがひどかったとし、清盛を強調し、読者の興味を引くため。

問　**「平家物語」が「平曲」とも呼ばれるのは、なぜか。**

答　琵琶の伴奏により語られたため。

二百十四年。前三六年～後八年。

5梁の朱异　梁の武帝の寵愛を得て国政を専断した。河南侯景の使者が来たとき、諸臣の反対を押してこれを入れ、大将軍としたが、景が背くに至って、武帝は敗死し、朱异は自殺した。「梁書」三十八に見える。「梁」は中国六朝の国の一つ。武帝が斉の帝位を奪って建国した。六代五十六年。五〇二年～五五七年。

5唐の禄山　西域出身の胡人で、玄宗皇帝・楊貴妃に寵愛され、平盧・范陽・河東の節度使を兼ねて軍事の権を握った。後に、いわゆる安禄山の乱（七五五年）を起こし、自ら大燕皇帝を称したが、我が子慶緒に殺された。「唐書」二百十五に見える。「唐」は隋に続く統一王朝で、李淵の建国になる。二十代二百九十年。六一八年～九〇七年。

5旧主先皇の…知らざつしかば　内容上二つに分けると、「旧主先皇の…思ひ入れず」と「天下の…知らざつしかば」とに分かれる。前半は、これらの四人が権力の簒奪者で、おごりを極めて横着非道な者たちであったことを述べ、後半は、その結果としてもたらされる社会の混乱や人々の苦難に対して全く関心がなかったことを述べて、前後相まって、「久しからずして、亡じにし」という結末になったとしている。冒頭でも、「諸行無常」「生者必滅」という仏教的真理を、「盛者必衰」という歴史の必然の方向に転換させているが、ここではさらに、非道な権勢におごった者が滅んでいくというように、歴史上の現象に近づけた論旨となっている。

8承平の将門　平将門。高望王の孫。鎮守府将軍良将の子。親族間の争いから、ついに承平五（九三五）年常陸・下総で乱を起こし、新皇を称したが、天慶三（九四〇）年藤原秀郷らによって討たれた。「将門記」「今昔物語集」二十五などに詳しい。「承平」は朱雀天皇の年号。九三一年～九三八年。

8天慶の純友　藤原純友。大宰少弐良範の子。伊予掾の任期が過ぎても帰京せず、将門の乱と同じ頃瀬戸内海を荒らしたが、天慶四（九四一）年小野好古に追討され、橘遠保に殺された。「純友追討記」「今昔物語集」二十五などに詳しい。「天慶」は朱雀天皇の年号。九三八年～九四七年。

8康和の義親　源義親。義家の子。康和年間、九州で乱を起こし隠岐に流されたが、途中出雲で再び乱を起こし、嘉承二（一一〇

七）年平正盛（たいらのまさもり）に追討され、翌年殺された。「康和」は堀河天皇の年号。一〇九九年～一一〇四年。

8平治の信頼　藤原信頼（ふじわらのの）。忠隆（ただたか）の子。後白河法皇の近臣として権勢を振るい、藤原信西と対立、源義朝（みなもとのよしとも）と結んで平治元（一一五九）年兵を挙げたが、平清盛らに敗れ、六条河原で殺された。「平治物語」に詳しい。一一三三年～一一五九年。「平治」は二条天皇の年号。一一五九年～一一六〇年。

9みなとりどりにこそありしかども　この逆接を受けるべき内容は、「おごれる心も猛きことも」長く続くことなく亡びたとなるはずだが、それを言わずに、「間近くは、…」と、平清盛のありさまに続いており、形の上ではよじれた文になっている。ここは、冒頭の「おごれる」（九四・3）「猛き」（同・3）をそのまま使っているので、それゆえに「異朝」の驕臣逆臣たちは「久しからずして、亡じにし」と結論づけたのを暗示したことになるのであろう。つまり、「久しからずして、亡じにし者どもなり。」という述部を、「本朝」の四人についても響かせている文脈とみることができよう。

10六波羅の入道　「六波羅」は、京都鴨川の東、現在の東山区轆轤（ろくろ）町六波羅蜜寺付近で、この辺に清盛は邸を構えていた。「入道」は出家して仏道に入ること、また、その人。清盛は仁安（にんあん）元（一一六六）年、病のため出家して、浄海と称した。なお、「入道」の語は、日本では出家までを意味することなく、何らかの理由で、剃髪して仏道に帰依したことを表すだけを言う場合があり、この場合もそれである。

10前太政大臣　清盛は仁安二（一一六七）年二月太政大臣（太政官の長官）になり、同年五月辞した。そのため「前太政大臣」と言う。

10平朝臣清盛公　桓武平氏のうち、いわゆる伊勢平氏の忠盛の子。父の築いた中央での地位と財力とを継ぎ、保元・平治の両乱に勝ち抜き、後白河天皇の院政と結び付いて急速に昇進し、ついに従一位太政大臣にまで達した。こうして、武力を背景とし、全国の半ばに及ぶ三十の知行国、五百余の荘園、対宋貿易の巨利を基盤とする、いわゆる六波羅政権を樹立した。しかし、一門の繁栄をはかるのに急なあまり、貴族・寺社などの旧勢力との対立を深め、一方貴族化して諸国の武士の支持を失い、その政権の力が傾き始めた頃、各地の源氏の蜂起を見ながら死んだ。

「朝臣」は上代の姓（かばね）の一つであるが、ここは、単なる敬称として用いられるようになった用法である。その場合は、三位以上の人に対しては氏の下に用いて名を言わず、四位の人に対しては氏と名との間に入れ、五位の人に対しては氏名の下に用いるのを例とした。「公」は、太政大臣・左右大臣を三公と言い、これに任じた人への敬称。

10伝へ承るこそ　この部分のセンテンスの構文は、「六波羅の…ありさま」が主部で、「心も…及ばれね」が述部であり、「伝へ承るこそ」は連用修飾句である。

11心も言葉も及ばれね　「れ」は可能の助動詞「る」の未然形。「ね」は、打消の助動詞「ず」の已然形で、「こそ」の結び。

鑑賞

この祇園精舎の一節は、美しい対句仕立ての名文句で書き始められており、その旋律に乗る哀感は、「方丈記」冒頭「ゆく河の流れ」の一節と並び、中世文学の書き出しの双璧と言われる。冒頭に「諸行無常」と「盛者必衰」の二つの仏教思想を提示し、これを「春の夜の夢」「風の前の塵」といった比喩を使って敷衍し、さらに、この思想を古今東西の歴史的な事例の列挙によって、実証してみせるという構成になっており、その史上人物の最後に、この物語の中心人物、平清盛を登場させ、その栄枯盛衰の運命を語り出すという、巧妙な導入の手法を取っている。この重層的な論旨の展開は、仏教の説法・唱導の導入の手法を踏襲したと言われるが、ここに、この物語の持つ仏教的基盤が見られよう。この一節を、「方丈記」の一節と対比させると、そこで描かれようとしている世界にはかなりの開きがある。石母田正氏は、「方丈記」の作者の特質が、自己反省的、内面的、道徳的であるのに比して、「平家物語」の作者の目は絶えず外の世界へ向かっているとして、それを歴史や運命に対する対応の姿勢や資質の違いとして捉えている。永積安明氏によると、「平家物語」の序章の文体は、今様風の七五調による詠嘆的な表現と言われながらも、中に四句韻文体の偈頌形式を踏まえ、それが流れがちな和歌的叙情を断ち切り、知的で反省的な切り替えを導き出しており、「方丈記」のように無常観の中に停滞し、情緒的表現に収斂されることを防ぐ結果になっていると言う。「平家物語」全体の骨組みの中で、巻頭の文章を、その理想的、世界観的側面をより重視するか、または叙事文学的、歴史的側面をより重視するかで、その評価は分かれる。全般的には、小林秀雄氏が序章の無常思想を「時代のはかない意匠」として否定し、「平家のあの冒頭の今様風の哀調が、多くの人々を誤らせた。平家の作者の思想なり人生観なりが、其処にあると信じ込んだが為である。（中略）一種の哀調は、この作の叙事詩としての驚くべき純粋さから来るのであって、仏教思想といふ様なものから来るのではない」と述べて、この作品の持つ叙事詩性を強調して以来、叙事文学的側面への関心が深まりつつある。こういった論議については、冨倉徳次郎氏の、「『平家物語』の基調には、この仏教文学的なものもあるが、また現実主義的な叙事文学としての現実凝視の精神もあるのであって、その二つの融合が注意せられて読まれていい」とする見解が一つの参考になろう。

この巻頭の一節の典拠としてよく指摘されるものの一つは、「涅槃和讃」の、

跋提河の波の音、生者必死を唱へつつ、娑羅双樹の風の声、会者定離を調ぶなり。祇園の鐘も今更に、諸行無常と響かせり。

であり、他の一つは、「梁塵秘抄」巻二の、

迦葉尊者は石の室、祇園精舎の鐘の声、醍醐の山には仏法僧、鶏足山には法の声。

である。これらは共に、当時の人の多くに何らかの形で親しい詩句であったわけで、「平家物語」の作者は、これらから得たイメージによって「諸行無常」という認識を形象化したのである。この当時の人々の一般的感慨と言えるものによって、これから展開する平家興亡の哀れを弔う言葉としたわけである。

古文を読むために　6

このコラムでは敬語を扱っている。敬語はなかなかやっかいなもので、生徒にも苦手意識を持つ者が多いが、ある程度の体系を身につけさえすれば、かえって古文を読解するのにこれほど役立つものもない。仕組みを理解し、特に人物関係を読み解く鍵にするようにしたい。

1 敬語

話し手が、話題の人物や物、また、聞き手に敬意を表すために、普通（これを常態という。）とは違った言い方をすることがある。これを敬語という。古文に描かれた世界は厳然とした身分制が行われていた世界である。人々も身分の差を意識して生活していた。そのために、古文の中には頻繁に敬語が登場する。敬語によって相手との関係性をはっきりさせることが重要なことなのである。我々も敬語によって人物関係が理解されたり、隠された主語などが敬語によって類推されたりできるのである。

敬語の形式として、「叡慮・玉体・御感・御覧」（以上、尊敬語）「拙者・愚僧・下官」（以上、謙譲語）などの接辞の付いた名詞、「給ふ・おほす・おはします・のたまふ・召す」（以上、尊敬語）「申す・いただく・たまはる」（以上、謙譲語）などの動詞、「たまふ・めす・…なさる」（以上、尊敬語）「…あげる・お…する・…していただく」（以上、謙譲語）などの補助動詞、「る・らる・す・さす」などの助動詞がある。

敬語を捉えるには次の三点を押さえる必要がある。

1　敬語の意味や種類。
2　敬意の主体は誰か。
3　誰への敬意を表しているか（敬意の対象）。

◎敬語の種類

まず、敬語の種類だが、尊敬語・謙譲語・丁寧語の三種類を見分けることになる。尊敬語は為手尊敬語・主体尊敬語、謙譲語は受け手尊敬語・対象尊敬語、丁寧語は聞き手尊敬語・相手尊敬語とも言われる。この名称によって敬意のあり方から敬語を見分けることができることが分かる。つまり、敬語の種類を参考にすると敬意の主体や敬意の対象を考えやすい場合もある。

敬意の主体と敬意の対象は次のような関係になっている。

敬語の種類	敬意の主体	敬意の対象	基本的な訳語
尊敬語	話し手 書き手	動作主（…が）に当たる人物	（お）…なさる お…になる
謙譲語	話し手 書き手	動作の及ぶ相手（…を・に）に当たる人物	（お）…申し上げる
丁寧語	話し手 書き手	聞き手 読み手	です・ます ございます

いずれの敬語も、誰からの敬意を表すかは、会話文か地の文かを手がかりに考える。

・会話文→その会話の話し手からの敬意。

・地の文→その文章全体の話し手・書き手からの敬意。

敬語は代表的なものを覚えておくと役に立つが、その際に注意を要するものがある。

◎敬語の表現方法

その動詞本来の意味を失い、他の動詞に付いて、ある意味を添える動詞を**補助動詞**という。これに対して、本来の意味で用いる動詞を**本動詞**という。

1　侍り・候ふ
　①「仕ふ」「あり」「をり」の謙譲語（本動詞）
　②「あり」「をり」の丁寧語（本動詞）
　③　丁寧の補助動詞
2　給ふ（賜ふ）
　①「与ふ」「授く」などの尊敬語（本動詞／四段活用）
　②　尊敬の補助動詞（四段活用）
　③　謙譲の補助動詞（下二段活用）
　　＊　聞き手に対する謙譲として会話や手紙の中にだけ用いられる。奈良時代には種々の動詞に付いたが平安時代には「思ふ」「見る」「聞く」「知る」の四語にだけ付く。
3　参る・奉る
　①「行く」「来」の謙譲語・「与ふ」「贈る」の謙譲語
　②「飲む」「食ふ」「乗る」「着る」などの尊敬語

これらの語は複数の語義からどのような意味・用法で使われているのかを判断しなければならない。活用の仕方や前後の文脈などから判断する。また、丁寧語は1の②③の「侍り」「候ふ」だけなので、初めに頭に入れてしまったほうが分かりやすい。

◎注意すべき敬語表現

●二重敬語（最高敬語）　尊敬語を二重に用いて、特別高い敬意を表す。地の文では天皇・皇后などに敬意の対象が限定されるので、主語を判断する際に有力な手がかりとなる。主な形には次の三つがある。

(i)　尊敬の助動詞＋尊敬の補助動詞
(ii)　尊敬動詞＋尊敬動詞
(iii)　尊敬動詞＋尊敬の助動詞

「おはします（おはす＋ます）」「おぼしめす（おぼす＋めす）」などの語も(ii)の例の一種である。

ただし、会話文や手紙文では、身分にかかわりなく、二重敬語が用いられる場合があるので、文種には注意が必要である。

●二方面への敬語　一つの動作に対して、種類の違う敬語を重ねて用い、それぞれ敬意の対象が異なる二方面に同時に敬意を表す場合がある。敬語を重ねる順序には次の三通りがある。

(i)　謙譲語＋尊敬語（謙譲語＋謙譲語＋尊敬語の場合も）
(ii)　謙譲語＋丁寧語
(iii)　尊敬語＋丁寧語（尊敬語＋尊敬語＋丁寧語の場合も）

敬語が用いられている時はこの例に限らず、「誰が」「誰を（に）」を正確に捉えることが大切だが、この二方面に対する敬語の(i)の例では特に人物関係を明らかにしておくことが理解を助けることになる。

●絶対敬語　天皇・上皇・皇后・皇太子など、身分の高い特定の人物に対してのみ用いられる敬語を絶対敬語という。動詞としては「奏す」（「言ふ」の謙譲語／天皇・上皇に用いる）「啓す」

（「言ふ」の謙譲語／皇后・皇太子などに用いる）などがあり、名詞としては「行幸」（天皇の外出）「行啓」（皇后・皇太子の外出）「御製」（天皇が詠んだ和歌など）などがある。

また、天皇などの高貴な身分の人が、会話の中で、自分の動作に尊敬語を使ったり、相手の自分に対する動作に謙譲語を使ったりして、自分を高めることがあり、これを自敬表現（自尊敬語）という。

2 音便

発音の便宜のために、単語のうちのある音が変化することを音便という。音便には、イ音便・ウ音便・撥音便・促音便の四種類があり、それぞれの品詞によって、種類や現れる活用形が決まっている。

●イ音便

動詞　カ行・ガ行・サ行の四段活用の連用形に「て」「たり」が続くとき
形容詞　連体形に体言や助詞「かな」などが続くとき
助動詞　「べし」「まじ」の連体形に現れる

●ウ音便

動詞　ハ行・バ行・マ行の四段活用の連用形に「て」「たり」が続くとき
形容詞　連用形に用言や助詞「て」「こそ」が続くとき
助動詞　「べし」「まじ」「まほし」「たし」の連用形に現れる

●撥音便

動詞　バ行・マ行の四段活用およびナ変の連用形に「て」「たり」が続くときやラ変の連体形に「めり」「なり」が続くとき
形容詞　連体形に助動詞「なり」「めり」「べし」が続くとき
形容動詞　ナリ活用の連体形に「なり」「めり」「べし」が続くとき
助動詞　「ず」「たり」「べし」「まじ」「なり」の連体形に「めり」「なり」が続くとき

●促音便

動詞　タ行・ハ行・ラ行の四段活用およびラ変の連用形に「て」「たり」が続くとき

音便は必ず起きるわけではないし、発音の便宜のためといっても現代の我々から見ると違和感のあるものもある。しかし、音便を正しく捉えないと活用が分からず、語そのものの理解に支障が生じる場合も出てくる。音便を学習することを目的にするのではなく、正しく語を捉える観点から学習させたい。さらに、撥音便については古文では表記されない場合が多くあることにも留意したい。例えばラ変「あり」に助動詞「なり」が付いたものは「あんなり」と撥音便化するが、しばしば「あなり」と表記されるのである。慣れればおおよそ決まったところに出現するので簡単に見分けられるようになるが、初めは丁寧に読み取りたい。また、動詞が音便化する際に接続助詞の「て」が濁音化することがあるので注意する。例えば、「急ぐ」＋「て」が「急いで」、「飛ぶ」＋「て」が「飛んで」となるのがそれに当たる。

（畠山　俊）

古文の窓❺

和文と和漢混交文

教材のねらい

文章は、内容と文体からできている。

現代において一般的な文体に、常体（「だ・である」体）と敬体（「です・ます体」）がある。常体で書いても敬体で書いても趣旨が変わらない場合、どちらの文体を選ぶかは、内容とは別の要素（例えば公的な文書か私的な文書か）から判断することになる。

近代より前の日本には、現代よりもはるかに多い種類の文体が存在した。例えば公的な文書は漢文で書く、手紙は候文で書くなど、書くべき文書の種類によって、使うべき文体の種類も異なっていた。文学の領域でも、物語は和文（鎌倉時代以降は擬古文）、軍記や読本などは和漢混交文といったように、ジャンルによって使われる文体がおおむね決まっていた。

しかし近代以降、こうした文体の多様性は失われていった。現代において、近代より前に書かれたもの（例えば古典文学）を原文で読むことは、かつて人々が読み書きしていた多様な文体の一部にじかにふれる経験をすることでもある。

この教材では、古典文学の文体とその多様性に目を向けることを第一のねらいとしている。『伊勢物語』と『平家物語』の例を通じて、古典文学の文体は一様ではないことに気づかせたい。

また、なぜ古典文学の多様な文体を知る必要があるのか（なぜ古典文学を原文で読む必要があるのか）ということについても、理解させたい。

解説

古典文学に見られる主な文体に、漢文、和文、漢文訓読文、和漢混交文がある。

漢文と漢文訓読文の違いは、漢文の学習をした生徒には理解しやすいと思われる。それらの具体例は、必要に応じて「漢文入門　訓読の世界」（一一七〜一二三ページ）を参照したい。

和文は、主に和語によって構成されている文章である。和語とは、『岩波国語辞典　第7版新版』（岩波書店）によれば「漢語や西洋などからの外来語に対し、日本固有の単語」である。

和文の具体例としてあげられているのは『伊勢物語』「芥川」の冒頭の文章である。まずは、この文章の現代語訳をおさえておきたい。ポイントは「よばひわたりけるを」が「求婚し続けたが」と訳せることを確認することにある。「よばふ」と「求婚する」は同じ意味であるが、「よばふ」は和語で「求婚」は漢語であることを確かめさせたい。

和漢混交文は、和文と漢文訓読文がまざりあったものである。和漢混交文を読むには、漢語の語彙はもちろんのこと、和語の語彙や文法もある程度は身につけておく必要がある。

ところで、なぜ古典文学を原文で読み、そこで使われている文体を知っておくことが必要なのだろうか。

例えば現代では、多くの人にとって、日常生活のなかで和文や漢文などを自ら書く機会はほとんどないだろう。ならば、それら

は学ぶ必要がないのだろうか。あるいは、趣味として学びたい人だけが学べばよいのだろうか。必ずしもそうではない。

古典文学を読み、現代では使わない語彙や文法をわざわざ学ぶのは、その経験が、生きていく上で思いのほか役に立つことがあると考えられるからである。

飯倉洋一は「未来に活かす古典―「古典は本当に必要なのか」論争の総括と展望」において、次のように述べている。

古文・漢文の学習の意義は、将来、読む可能性のある古文・漢文ないしは、古文・漢文的表現を含む現代文に対した時に、それに適切に対応する読解力、さらには実用的な言語運用能力の養成である。または、過去の膨大なテキストを利活用しようとする時に必要な技術の修得である。

ここで言われている「過去の膨大なテキスト」には、当然ながら、文学以外の分野のものも多分に含まれている。

人間は、さまざまな文章に出会いながら生きるものである。例えば将来、仕事上の必要から、明治期に書かれた文章を引用しながらまとめられた文書を読まなければならないことがあるかもしれない。

明治期は、時代区分の上では近代である。しかし日本語の表現においては、近代より前の時代から引き継がれた文語文（漢文・和文・漢文訓読文・和漢混交文など）や、言文一致体などの多様な文体が存在していた時代であった（詳しくは「明治期の文語文と口語文」一七七～一八〇ページを参照）。

そうした時代に書かれた文章を読まなければならなくなった時、少しでも和文や漢文、漢文訓読文や和漢混交文に親しんだ経験があれば、また、古語辞典や漢和辞典を引いた経験があれば、読解のハードルはずいぶん低くなるだろう。

古典文学の内容を知りたいだけなら、現代語訳で読んでもよいかもしれない。しかし、古文・漢文を読むことの有効性を考えるなら、どんな作品でも、原文で読む経験をしておくのが結局は一番よいのではなかろうか。

参考

日本語学会編『日本語学大辞典』（東京堂出版、二〇一八年）の「和文」の項目では、和文を次のように定義している。

広義には日本語で書かれた文章を意味する。漢文・英文などに対応する言葉として用いる。「日本文」「国文」「邦文」などということもある。狭義には、日本文のなかでも、和語（＝やまと言葉）を用い、おもにひらがなを用いて書かれた文章をさす。その典型は、平安時代の物語などの優雅な文章である。表記法に注目して「仮名文」「ひらがな文」ということもある。この場合、確かに仮名を中心としているが、漢字表記された漢語が若干含まれていることに注意しておく必要がある。

同じく『日本語学大辞典』の「和漢混淆文」の項目では、和漢混交文を次のように定義している。

従来用いられた概念は必ずしも明確でないが、和文と漢文（訓読）との混用の文の意に用いられ、表記の上からは多く漢字仮名交り文をさして、具体的には主として鎌倉時代以降

の『平家物語』『太平記』などの軍記物語等の文体をいう。この種の文は、中古の和文と漢文訓読文の語法に基づき、漢語を多く加え、更に中世以降の俗語なども併用し、その中には変体漢文の要素も多いのが普通である。広義には、和文・漢文訓読の両文脈の要素を併せ含む文体一般をさすことも出来るが、必ずしも一般的ではない。「漢字仮名交り文」は表記分類上の概念であり、「和漢混淆文」は文脈分類上の概念であって、対立するものではない。

飯倉洋一「未来に活かす古典―「古典は本当に必要なのか」論争の総括と展望」は、荒木浩編『古典の未来学―Projecting Classicism』（文学通信、二〇二〇年）に収録されている。

風間誠史「近世和文とは何か」（『近世和文の世界―蒿蹊・綾足・秋成』森話社、一九九八年）では、近代を「生産と消費の効率化を最大の目的とする社会」とし、「誰もが、いつでもどこでも容易に書け、容易に読める文章が近代的文章表現ということになる」と述べている。また、「文章表現における近代と前近代を分かつものは、多様な文体と均一な文体という事象ではなく、多様性を自明のことと考えるか、それを何とか均質化しようとするかという指向性の違いということになるだろう」と指摘している。

明治期の多様な文体については、加藤周一・前田愛校注『文体』（日本近代思想大系、岩波書店、一九九九年）が参考になる。

（佐藤　至子）

単元の言語活動６

人物の心情を想像して「木曽の最期」を脚本化する

活動のねらい

本活動では、作品を脚本化し、実際に演じてみることで、登場人物の心情を生き生きと想像することを目的とする。脚本化という方法は、地の文では直接的に表現されていない登場人物の心情を、動作や台詞として顕在化させる。義仲、巴、兼平の心情のすれ違いの経緯が、作品とは異なる角度から、深く理解されるのではないだろうか。

「木曽の最期」の特徴の一つに、すれ違いを重ねる登場人物の悲哀に満ちた人間ドラマが生き生きと描写されている点が挙げられる。具体的には以下のような要素に、登場人物の気持ちのすれ違いが確認されよう。

(1)最期まで付き従おうとする巴に対して、義仲はその場を去るように命じる。

＝巴は義仲を慕って一緒にいたいと思っているのに対し、義仲は主君としての体裁を保つために弱みを見せたくないと考え、すれ違っている。

(2)義仲は「もう疲れた」と乳母子の兼平に甘えるが、兼平は義仲に自害を勧める。

＝義仲は先ほどの巴と同様に、最期まで兼平と一緒にいたいと願うが、兼平は武士として名誉の死を遂げてほしいと切に願う点で、すれ違っている。

こうした「木曽の最期」の特徴について、佐伯真一氏は次のようにまとめておられる。

自分の弱さをさらけ出し、兄弟のような兼平の気持ちも、どちらも人間らしい感情であり、また、愚かな人間のこだわりである。結局、兼平の奮戦の背後で、松原へ向かった義仲は、深谷はまって泥まみれになってもがくところを射られ、首を取られてしまう。自分の願いがかなわなかったことを知った兼平は直ちに自害する。そこに描かれているのは、巴と義仲、義仲と兼平の間で、二通りにすれ違った愛情の物語であるともいえよう。

『平家物語』は、ここで理想的な英雄の美しい最期を描いているのではない。愚かな人間たちのこだわりがすれ違ったあげくに、泥まみれの最期に至るさまを、その愚かさに限りない共感を込めて描いているのである。

（『人生をひもとく日本の古典・四　たたかう』岩波書店）

今回の活動では、本文を脚本化し、演劇化することで、登場人物の思いを明確な形で言語化し、登場人物のすれ違いをよりはっきりと生徒達に認識させることを目標とする。

タイトル・序文の解説

生徒達が本文を理解する際に、言語化された文章の意味を解釈するだけでなく、演劇などの様々な形態で再生産することが可能であることを学ぶ機会としたいという狙いを、タイトル・序文を通じて伝えたい。なお、今回の課題だけでなく、能「巴」などを紹介し、過去にも様々な形で翻案化されてきたことを伝えることもできよう。

「課題」の解説

課題　**「木曽の最期」を脚本化し、演じてみよう。**

「人物の心情を想像」するという点については、巴、義仲、兼平の明文化されていないそれぞれの思いを生徒達に想像し、理解してもらうことを目的としている。前述の通り、登場人物の気持ちはそれぞれすれ違うのであるが、本文ではそれが書かれていない。「脚本化」によって、台詞の形で登場人物がそれぞれの思いを吐露されるため、どのような点ですれ違いが生じているのかが明らかになるはずだ。

「活動」の解説

1　**担当するシーンと役割分担を決めよう。**

① **グループを作り、次のA～Cから一つずつ担当するシーンを決める。クラスの人数によっては一シーンを担当するグループが二つになってもよい。**

シーンA「義仲と巴の別れ」
シーンB「義仲を励ます兼平」
シーンC「義仲と兼平の最期」

② **義仲役・巴役・兼平役・ナレーション役・演出などの役割分担を決める。**

2　**「せりふ」と「ナレーション」を考え、脚本を作ろう。**

① **グループ全員で話し合い、登場人物の「せりふ」を考える。「木曽の最期」の会話文を参考にするが、登場人物のさまざまな心情を想像して、本文には書かれていない表現を補ってもよい。** 知技(1)オ・(2)ウ

② **場面の説明など、「せりふ」だけでは伝わりにくい要素を補足説明する「ナレーション」を考える。** 思判表B(1)イ

③ **「せりふ」と「ナレーション」を脚本にまとめ、読み合わせをする。不自然な「せりふ」や、伝わりにくい「ナレーション」の表現がないか確認する。** 知技(1)エ　思判表B(1)オ

3　**完成した脚本を基に演じてみよう。**　主態

①　グループごとに脚本を輪読して、発表する。「せりふ」の担当者は、登場人物の心情を想像し、感情を込めて読む。

②　ほかのグループの脚本のよかった点をあげる。

特に、活動の序盤では、教員がある程度方向性を示すことで、生徒の取り組みやすさが格段に上がるだろう。**1**では、「本文の会話文では直接表現されていない登場人物の心情」を、台詞や動作で表現するよう指示すると、方向性が定まると思われる。

生徒の様子を見ながら、取り組むべき課題を適宜具体的に説明することが重要になる。

評価規準

〔知識・技能〕⑴エ　文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。
〔知識・技能〕⑴オ　我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解している。
〔知識・技能〕⑵ウ　古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解している。
〔思考力・判断力・表現力等〕B⑴イ　「読むこと」において、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。
〔思考力・判断力・表現力等〕B⑴オ　「読むこと」において、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもっている。
〔主体的に学習に取り組む態度〕　進んで音読することを通して『平家物語』特有の表現を味わい、軍記物語の文体の特徴について理解し、今までの学習を生かして、「木曽の最期」を脚本化し、物語に描かれた人物の心情を深く読み取ろうとしている。

◎学習指導要領の言語活動例との関連
〔思考力・判断力・表現力等〕B⑵オ

（小林　俊洋）